埼玉大学紀要　教育学部，70(2)：207－236（2021）

SDGs をモチーフにした教材分析に基づく美術教育の展開可能性
―― 開発教材「誰一人取り残さない世界へ」の実践から ――

小島容子　　加須市立昭和中学校
内田裕子　　埼玉大学教育学部芸術専修美術分野

キーワード：SDGs、総合的な学習の時間、美術科、合科、協働

１．はじめに

本研究では、近年盛んに言われ始めた SDGs〔Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」〕をモチーフ〔手掛かり〕に、中学校の「総合的な学習の時間」及び「美術科」との「合科的な指導」のための教材を開発し、その授業の実践を通して、美術教育の展開の可能性について考察を行った。

SDGs をモチーフに選んだ理由には、SDGs の「目標 4」即ち SDG4 に「全ての人々への包括的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」[1] と掲げられていること、更に「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現に向けて（ESD for 2030）」のロードマップに、SDGs を達成する 2030 年までに残された時間が殆ど無く SDGs を加速する必要がある [2] と記されていることが挙げられる。また、本研究で開発する教材の主題に「誰一人取り残さない世界へ」の文言を用いた理由は、2015 年 9 月 25 日に第 70 回国連総会で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ〔Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development〕」の導入部において「誰一人取り残さない〔leave no one behind〕」[3] と記されていることがある。

更に、SDGs をモチーフにした「美術科」の教材を開発した背景には、ユネスコ〔国際連合教育科学文化機関, United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, U.N.E.S.C.O.〕が、2020 年 5 月 25 日～31 日の「国際芸術教育週間」に Web サイトに掲載した文章がある。2011 年のユネスコ総会では、5 月の第 4 週に「国際芸術教育週間〔International Arts Education Week〕」を設けることを決定したが、それを承け、上記の Web サイトには｛芸術における創造性が COVID-19 の被害に見舞われた人々に齎す回復力の大きさ、ユネスコが「視覚芸術及び舞台発表芸術の教授学習である『芸術についての教育』と、芸術と教育とを融合させて学習を進展させ質を高める『芸術を通した教育』の 2 種類の芸術教育を支援」すること、芸術教育が「SDGs、特に SDG4『質の高い教育』と SDG5『ジェンダー平等』、SDG8『文化と創造性を通じた働き甲斐と雇用の機会の拡大』、SDG16 の精神に基づく紛争の緩和と平和の構築を横断的に促進する」[4] こと｝が記されていた。

先行研究には、SDGs の観点に基づく「美術科」における鑑賞教材の開発である「持続可能な社会づくりの担い手を育むための美術科の題材：鑑賞活動『デザインで変える現在と未来』の実践における ESD の観点」[5] があるが、SDGs と美術教育に関する研究は未だ緒に就いたばかりと言え、数は多くない。また、上記の先行研究と本研究との違いは、同じ「美術科」に関する教材開発ではあるものの、本研究は「総合的な学習の時間」と「美術科」との「合科的な指導」のための教材開発という点である。本研究で開発した教材では、SDGs の理解は「総合的な学習の時間」の授業目標とし、それに続く「美術科」の授業では「総合的な学習の時間」に学んだ SDGs の内容をモチーフに美術の鑑賞及び表現を行い、その結果、美術が持つ多様性に基づく｛創造性、想像力に富む問題解決力、批判的思考力、社会的調和、協調性、寛容性、回

復力、革新性、表現の自由〕[6]や美的人間性について学ぶことを授業目標にした。そのため、本研究の方法及び構成は、表1及び表2に示す通りとした。

表1　研究の方法

step	内　容
1	予備研究として、教員養成課程の学生〔8人〕を対象に、開発する教材に関連する授業を行う。
2	SDG4 の「全ての人々への包括的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」の観点に基づき「総合的な学習の時間」のための「SDGs でつながる ～誰一人取り残さない世界へ～」を単元名とする、中学校第1学年を対象にした教材〔4時間〕を開発する。
3	「総合的な学習の時間」のための「私たちの世界をよりよい場所にしていくにはどのようなことが必要か、SDGs の理念を基に地球に生きる一員として課題解決に向けて仲間と協働して考えを深め、身近な生活や、今の自分の考えを見つめ直していく」ことを学習目標とする授業を開発する。
4	「美術科」のための「アーティストの作品鑑賞や対話的学習から多様な考えに触れ、アート表現を通して SDGs を伝えるにはどのような方法があるか、協力して考えを広げていく」ことを学習目標とした教材〔4時間〕を開発する。
5	「総合的な学習の時間」の授業は、第1学年の全クラス〔197人〕同時に、担任教員が各教室で、同一のスライド資料を用いて実施する。
6	「美術科」の授業は、第1学年全クラスの授業を、1クラス毎に「美術科」教員〔小島〕が実施する。
7	授業実践に基づき、学習指導案を改良する。
8	授業の分析及び考察を行う。

表2　本論の構成

章	内　容
2	SDGs とそれに関わる ESD〔Education for sustainable Development〕の内容
3	開発した教材に関する「総合的な学習の時間」及び「美術科」の学習指導案
4	実施した「総合的な学習の時間」及び「美術科」の授業の概要及び授業の分析
5	SDGs をモチーフにした開発教材の分析に基づく美術教育の展開可能性についての考察

２.SDGs と ESD の内容

2-1 SDGs と ESD の関係

SDGs に関連する用語に ESD〔Education for sustainable Development〕がある。ESD は、SDGs が採択された国連で教育分野を担うユネスコの教育局〔Education Sector : ED〕が 2005 年から継続して掲げるものであり、2020 年～2030 年の国際的な実施枠組は「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現に向けて（ESD for 2030）」[7]として採択されている。また日本では、2014 年の 11 月に、名古屋市及び岡山市において「ESD に関するユネスコ世界会議」が開催される等、ESD に関わり様々な教育が行われており、教科書を発行する各社は、Web や紙のメディアを通して SDGs と ESD に関わる特集を組んで来ている。

「美術科」も例外ではなく、上記の論文においては「美術科では、仏像や建築、絵画等、国内外の伝統文化に対する従来の鑑賞活動がESD題材に相当する〔略〕表現活動でもESDに様々にアプローチする教科書題材が存在する」[8]と記されている。また、日本では「全ての学校におけるESDの実践に資するため、ESDに関する研修を企画・実施する指導主事や学校の管理職の教員等を主な対象に」したとされる「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き（初版）」〔以後「手引き」と記す〕が2016年3月に「文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会」より作成され送付されている[9]。この「手引き」に依ると「ESDを実践する上で留意すべきポイント」に｛何のために何を学ぶのか、どのように学ぶのか、何ができるようになるのか｝といった学習の目的、方法、成果への留意に加えて「どのように取り組むのか」が重要であるとしている。これについて「学校経営、カリキュラム、校内環境、地域連携のバランスある取組とする。総合的な学習の時間を有効に活用するなどして教科・領域横断的に計画し、学校全体が協力し合い、特別活動なども活用して、学びの風土を形成する。そのために、教員は、知識を教え込むのではなく、児童・生徒の学びを支援する役割となる」[10]と説明されるが、本研究は、このポイントから教材開発に取り組んだ研究と言える。

更に「手引き」では「STEP5 学校運営（ホールスクール（機関包括型）アプローチの展開）」[11]として表3に示す六つのポイントを掲げる。なお、ここでの「ホールスクールアプローチ〔Whole School Approach〕」とは、学校全体の責任においてESDに取り組むことを意味する[12]。

表3　STEP5 学校運営におけるポイント

ポイント	タイトル〔概要〕	掲載頁
1	学校教育目標及び学校経営方針にESDを位置付ける 〔学校全体でESDに取り組むため、学校教育目標及び学校経営指針にESDを明確に位置付ける〕	22頁
2	組織としてESDを推進する 〔教員の異動で取組が途絶えるのを防ぐため、組織的に実施する〕	23頁
3	ESDを教科外の学習で展開する 〔教科外の総合的な学習の時間等や学校外で地域住民と共に実施する〕	23頁
4	ESDを通じて校内連携及び環境整備を行う 〔事務・用務を含む全教職員によるESDの視点に立った学校運営を行う〕	23頁
5	積極的に情報提供を行う 〔地域住民を巻き込んだ学校運営のため、情報提供を通じた地域住民との連携を行う〕	25頁
6	他校と交流する 〔地域の類似性や特殊性を認識する機会にするため、学校間交流を深める〕	25頁

2-2 SDGsとESDの概要

「手引き」の「ESD推進のための研修実施におけるポイント」には、既に実施された研修事例が挙げられているが、そこに記された事例の研修名は「『SDGs』とは何か：『持続可能な開発のための教育』入門研修」[13]とされている。このことは、上記の「ESDを実践する上で留意すべきポイント」に記される、学習の目的を理解することが、教材開発の前提にあることを裏付けているが、更に「手引き」では「ESDを理解する上での留意事項」[14]として、表4のようなQ＆Aを記している。但し、表4のQ＆Aの「A」に当たる「解説〔概要〕」には「手引き」に記された文章の概要を記す。

表 4　ESD を理解する上での留意事項 Q&A

No.	疑問・質問	解説〔概要〕
1	ESDとは何をすればよいのでしょうか。ねらいや指導方法としてはどういったことが考えられるでしょうか。	• ESD は、持続可能な社会づくりの担い手を育てるための教育。 • 持続可能な社会づくりへの価値観と実践力の育成が目的。 • 児童・生徒の主体的な学びや活動が必要であり、教員には、児童・生徒を支援するファシリテーターとなることが求められる。 • ESD のテーマとして典型的なものは環境だが、持続可能な開発を環境、経済、社会の統合的な発展という視点で捉えることも重要。 • 自らの学校、児童・生徒、学校を取り巻く地域にとって重視すべき「持続可能性」とは何か、そのために何ができるかを探求する学びを考えることが ESD を理解する第一歩。
2	ESDということを特に意識せず、学習指導要領に基づき指導を行っていますが、どのように考えればよいでしょうか。	• ESD については、学習指導要領にその視点が盛り込まれている。 • 持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う実践が重要。 • 総合的な学習の時間で ESD に取り組む事例が数多くある通り、ESD のもつ総合性と、総合的な学習の時間において想定される横断的・体系的な学びの間には、通じ合うものがある。 • 各教科でも、学習指導要領に盛り込まれている持続可能な社会の構築に関わる視点を踏まえて指導することが重要。 • 学級活動・生徒会活動・学校行事等の特別活動、その他学校管理下の様々な活動の中で位置付けることも学校全体としての取組につながり、ホールスクールアプローチとして有効。
3	「ESD」という言葉は難し過ぎるので、これを用いずに活動を展開しても良いでしょうか。あるいは、他に分かり易い言い方はないでしょうか。	• 日本ユネスコ国内委員会が公募で大賞を授与した ESD の愛称は「今日よりいいアースへの学び」。また ESD に先進的に取り組む岡山市は「（E）ええもの（＝よいもの）を（S）子孫の（D）代まで」と捉え普及活動を行う。このように、持続可能な社会づくりを自らのものとしてとらえるにはどうしたらよいかを考えること自体が ESD の目的の一つ。
4	学校が地域との連携を進めるには、どういった工夫が必要でしょうか。	• 例えば、定例の PTA 活動、地域の祭礼・防災等の活動、地域コーディネーター、学校評議員や学校運営協議会等の地域関係者と意見交換を行う場等で、地域との連携を行い、ESD の実践に向けた取組への理解を深める。その際、学校支援地域本部のコーディネーターや自治会長等に橋渡しを依頼することも有効。
5	ESDは対象テーマが広いと思います。研修テーマや課題については、どう選ぶのでしょうか。	• 持続可能性に関わる課題を解決するには、個々の分野に加え分野横断的にアプローチすることもでき、対象テーマは幅広い。そのため、例えば自然環境や文化、まちなみ、景観等、各学校が学校や地域の特性を生かしたテーマや課題を取り上げたり受講者のニーズに基づいて設定したりする等、目的に応じたプログラムを構成する方法がある。

表 4 に示される ESD の目的は、No.1 の「解説〔概要〕」に見られる通り、持続可能な社会づくりへの価値観と実践力を持った持続可能な社会づくりの担い手を育てることとされている。また「持続可能な社会づくり」のために学習する概念例として、国立教育政策研究所が 2012〔平成 24〕年 3 月に示した「学校における持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究［最終報告書］」は｛多様性（いろいろある）、相互生（関わり合っている）、有限性（限りがある）、公平性（一人一人大切に）、連携性（力を合わせて、責任性（責任を持って）｝[15] を挙げている。更に「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の例としては｛批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、繋がりを尊重する態度、進んで参加する態

度〕[16]等が挙げられる。

なお、こうした学習が推進されるようになった理由を知るには、SDGs が掲げられた背景を知る必要があるが、これについては、国連開発計画〔UNDP〕駐日代表事務局が提示する「持続可能な開発目標（SDGS）の背景」[17]に記されている。それによると、抑々は、2012 年にリオデジャネイロで開催された国連持続可能な開発会議〔リオ+20〕で、世界が直面する喫緊の｛環境、政治、経済｝に関する課題に取り組む普遍的目標を策定したことに始まるとされ、これは貧困への取り組みとして 2000 年から始まったミレニアム開発目標〔MDGs〕の後継となる目標とされる。MDGs では測定可能な目標を定め、貧困問題を解消するための活動が展開されたが、これに続く SDGs では、相互接続性を備えた 17 の目標を掲げ、人類全員に影響する様々な問題を対象に、将来の世代のために暮らしを改善する取り組みを求めることとなったと言う。

他方、SDGs のような目標を掲げる必要が生じた理由には、SDGs の重要な 5 要素とされる｛人間〔people〕、地球〔Planet〕、繁栄〔Prosperity〕、平和〔Peace〕、協働〔Partnership〕｝[18]に関わる問題の肥大化が挙げられる。例えば「地球」に関する問題としては「天然資源の減少並びに、砂漠化、干ばつ、土壌悪化、淡水の欠乏及び生物多様性の喪失を含む環境の悪化」や「気候変動〔略〕気温の上昇、海面上昇、海洋の酸性化及びその他の気候の変動の結果〔略〕地球の生物維持システムが存続の危機に瀕している」[19]こと等が問題に挙げられるが、他の要素に関しても同様に、重大な問題が差し迫ったことがある。

３. 開発教材

3-1 SDGsと美術教育の関係

上記の通り、SDGs の各目標は互いに関連し合っているため、「図画工作科」や「美術科」で行う美術教育も当然ながら、SDG4 の教育に関する内容のみに限らず他の目標に関連する。しかも美術教育は、グリーン〔Sarah Maxine Greene, 1917- 2014〕が提唱した「自由のための教育〔education for freedom〕」にも関わるため、更に広い分野にまで関与すると考えられる。何故なら「自由のための教育」では、人々が対話を行い協働して状況を乗り越えて新たな可能性を実現しようとする空間を「自由」と捉え、この空間を学校で人々の間に創り出すことを「教育」と捉えるが、この「自由」のための「教育」を可能にする方法を「イマジネーション〔社会的構想力〔social imagination〕〕」と考え、その「イマジネーション」を喚起する「答えのない問い」にアートが最適であると考えるからである[20]。このことは、あらゆる問題解決に不可欠な想像力や構想力を育むのが美術教育である点を示唆するが、更に、美術における表現内容には、人間の思想が関与し且つ表現形式にはあらゆる教科で身に付けた知識や技能が関与するため、これらのことから、美術教育で行う活動は、自身で考えて作業を行うという、人間が生きるために行う全ての行為に深く関わると言える。そのため、従来から「美術科」と「総合的な学習の時間」の関連が指摘され、実際に「美術科」の授業をそのまま「総合的な学習の時間」で行ったり美術に関する共同制作等のプロジェクトを「総合的な学習の時間」で行ったりする授業が多いことも首肯できる。但し、今回開発を試みた教材は、「総合的な学習の時間」で学んだ内容を「美術科」に生かす教材として、同じ SDGs をモチーフにしながらも「総合的な学習の時間」と「美術科」の各分野に適した学習目標及び学習方法を設定した点で、上記の教材とは異なる。

3-2 教材の概要

開発した教材の概要を次の表 5 に示す。表 5 に見られる通り、本教材は「総合的な学習の時間」と「美

術科」の「合科的な指導」形態により、加須市立昭和中学校の第1学年の全生徒を対象に、全8回〔1校時：50分〕の授業を各々4回行った。また「総合的な学習の時間」は、1回目及び2回目を2021年1月27日〔木〕5〜6校時に、4回目を授業参観日である2021年3月19日（金）の5校時に、いずれも第1学年の全クラスで同時に行い、3回目のみクラス毎に適時行った。他方「美術科」の4回の授業は、2021年2月26日〔金〕〜3月16日〔火〕の間にクラス毎に行った。表5の「回」の欄には、本教材を展開した「総合的な学習の時間」と「美術科」の授業の回の順番を記し、「授業」欄には「総合的な学習の時間」と「美術科」の各名称と、その各々における授業回数を〔全〕4回を分母に分数で表示した。

表5　開発教材の概要

回	授　業	学 習 内 容
−	＜事前学習〔宿題〕＞	各自で「不要になったモノ」の実物若しくは実物を撮影した写真を準備し、更に「不要になったモノ」に関してワークシートに記入する。
1	総合的な学習の時間〈1/4〉	SDGsの｛貧困、環境、ジェンダー、平和｝等の説明から、SDGsが生活に関わる目標であることを知り、日本の目標達成状況や世界でのランキングを予想することによりSDGsの概要を理解する。生徒独自のランキングを作成する。
2	総合的な学習の時間〈2/4〉	各自持参した身近で「不要になったモノ」が不要になった理由やその改善・解決策を考えることを通してSDGsの理解を深める。 SDG18を考案し、更に、ピクトグラムを用いてSDG18のアイコンを作成することにより、SDGsの理解を更に深める。
3	総合的な学習の時間〈3/4〉	SDG18を完成させ、SDGsのすごろく「ゴー・ゴールズ！」を実施する。
4	美術科〈1/4〉	アーティストの作品を鑑賞して、SDGsを基に自分の考えを深め、他者と考えを共有する。 ・《審判の日》SI ON〔シオン〕の作品鑑賞。 ・「見立て」「インスタレーション」について学ぶ。 ・個人で作品のアイデアを練る。 ・各自の案を伝え合い、班員で考えを共有していく。
5〜6	美術科〈2/4~3/4〉	班で「完成予想図」の制作に取り組む。 ・班で一つの「完成予想図」を制作する。 ・「完成予想図」には絵図の周りに説明などを記入する。 ・案によっては実物や写真などで表現する。
7	美術科〈4/4〉	「完成予想図」を完成させ、発表準備をする。 ・発表方法や役割分担をする。 ・班活動について、他者評価をする。
8	総合的な学習の時間〈4/4〉	プレゼンテーション ・各班3分で「完成予想図〔作品〕」及び制作過程を発表する。

3-3 学習指導案

次に、本教材を構成する「総合的な学習の時間」と「美術科」の学習指導案を表として示す。但し、各学習指導案はNo.1〜No.3の3部に分け、各部の内容は、No.1が教材の枠を示す｛単元名／題材名、準備、資料、目標｝等、No.2が｛単元について／題材について、評価規準｝等、No.3が「展開」とし、各々「総合的な学習の時間」は表6〜表9、「美術科」は表10〜表12として掲載する。

表６　「総合的な学習の時間」学習指導案 No.1

単元名	SDGsでつながる ～誰一人取り残さない世界へ～				
時 間	4時間	対 象	中学校　第1学年	場 所	各教室
準 備	**〈教員〉** 大型テレビ、ノートPC〔教員用〕、タブレットPC〔生徒全員用〕、スライド資料、HDMIケーブル、ワークシート3枚。 **〈生徒〉** 不要になったモノ、宿題〔「不要になったモノ」について記載〕、色鉛筆、色ペン。				
資 料 〔出典〕	① 池上彰監修, 2020『世界がぐっと近くなる SDGsとボクらをつなぐ本』学研プラス. ② 熱田千鶴「Hell Global Goals! 2030年までに目指す、SDGsとは？」『FRaU』2020年8月号, 講談社, pp.18-19. ③ ACジャパン「おむすびころりん、1億個」〔全国キャンペーン〕, <https://www.ad-c.or.jp/campaign/self_all/self_all_02.html>. ④ 国際連合広報センター「ゴー・ゴールズ！すごろくでSDGsを学ぼう」, <https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/go-goals/>.				
目 標	私たちの世界をよりよい場所にしていくにはどのようなことが必要か、SDGs の理念を基に地球に生きる一員として課題解決に向けて仲間と協働して考えを深め、身近な生活や、今の自分の考えを見つめ直していく。				

表７　「総合的な学習の時間」学習指導案 No.2

項 目	内 容
単元について	**⑴ 生徒観** 授業を受ける予定である中学生〔197 人〕を対象にした事前調査の結果では、84%の生徒が「SDGs」という言葉について「知らない」と回答し、「サスティナブル」という単語についても 74%の生徒が「知らない」と回答している。「SDGs」については第 3 学年「社会科」、第 3 学年「家庭科」で学習する予定であり、第 1 学年ではその知識がほぼ身に付いていない。また、「地球を住みやすい星にしていくために、どのようなことができると思いますか」という質問に対しては、ゴミの削減や節電などによる地球温暖化防止やエネルギー消費の削減などを述べている生徒が多く、特に環境問題を身近な課題として捉えていることが分かった。 **⑵ 教材観** SDGs の 17 の目標を通して世界を取り巻く課題に目を向け、それを身近な問題として捉え、更に班での対話を通して思考を深め、新たな課題を見付けていくという学習内容である。 単に SDGs の知識を習得するのではなく、地球上の様々な課題を自らの問題として捉えること、一人一人が自分にできることを考え実践していくことを身に付けること、延いては課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目的としている。 本単元では、生徒の自主的な学びを促すため、SDGs ランキングをつくって互いの価値観を共有したり、身近で「不要になったモノ」を持ち寄ってそれを基に考えを深めたりして、自分たちで課題を見付け思考する授業展開とした。更に、学習のまとめでは「私の SDG ～18 番目の目標～」を設定した。「総合的な学習の時間」で深めた自分の考えや思いを、形や色彩、イメージなどの美術の力を効果的に用いて表現する教科横断的な課題である。SDGs の 18 番目の目標をつくるとしたらどのようなものか、ピクトグラムでアイコンを表現する。より多くの人に分かり易く伝えられるように工夫する手段として、形や色彩を用いて自分の考えを整理して表現し、その意図を説明できることがねらいである。形や色彩の表現を通して、アイコンにどのような想いを込めどのように思考したのかに気付かせ、深められた考えをより具体的に述べることで学びを深める手段とした。この学習を通して自ら考え、よりよく問題を解決する資質や能力、ものの考え方や考えを表現する方法を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働で取り組む態度を育みたい。 この SDGs の学習内容は一過性の流行に終わらせないことが重要であり、この単元の学習後には「美術科」で教科横断的な題材「アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～」を設定する。美術を生活や社会に生かすことの実感を持てる題材の工夫に、本単元で身に付けた知識を使うことが可能である。3 年間を通して、系統的、教科横断的な学習を学校全体で計画して取り組んでいくことで、生徒の学びを更に深めることができる。それにより身近な問題に積極的に関わろうとする姿勢を育て、社会の一員としての自己の生き方を考えることが期待できる。

	⑶ 指導観 本単元では生徒の主体的な学びや活動を目指しており、教員には生徒を支援するファシリテーターとなることが求められる。そのため、SDGs の具体的な目標や内容の指導にならないよう配慮する必要がある。 導入では AC ジャパンの「おむすびころりん、1 億個」の CM 動画を視聴する。見慣れたテレビ CM の中にもこうした SDGs へのメッセージが込められていることに気付くきっかけとしたい。SDGs の内容に触れる際は、生徒の身近な生活からの視点で考えさせることを重視し、レジ袋の有料化やプラスチックストローの廃止、アンケート用紙等の性別記入欄の有無など、より実体験に近い内容を取り上げるようにする。事前の調査結果からも地球上の問題の多くを環境問題として捉えている生徒が多いことから、貧困やジェンダー、平和などについても触れ、SDGs の内容が多岐に亘ることも理解させたい。世界の SDGs 達成状況の国別ランキング〔2020 年、2019 年〕も紹介することで、日本の状況や他国との比較、上位の国、下位の国などの特徴などにも興味をもたせたい。 展開の「SDGs ランキング」では、各自が優先的に取り組みたいと思う上位三つを選び、1 位に選んだ目標をタブレット PC に書き込んで大型テレビに映し、互いの考えの違いを共有できるようにした。「身近なモノから考えよう」では、各自が身近で「不要になったモノ」を持参し、不要になった経緯や使用した期間などから、普段自分たちがどのように「モノ」と関わっているかに気付かせる機会とした。4 人の班となり、「不要になったモノ」を生かす方法やモノが不要にならないための解決方法や対策などを出し合う。ここでの問題がどの SDGs の目標とどう関わりがあるのか、そこにはどのような課題が考えられるのか、そこに自分たちがどのように関わっていくことが望ましいかをじっくり思考させる。自分が使用していた身近なモノを用いることでより生活に即した視点で考えることができ、更に班で解決策を導くことで他者との協働による学びの必要性を実感させたい。この対話を通しての気付きや学びが今後の教科横断的な学習に生かされるため、対話的な学習の直後に振り返りの時間を設定する。 学習のまとめとなる「私の SDG ～18 番目の目標～」では美術の形や色彩、イメージを基に構想するが、技能評価ではないため、自身の考えを伸び伸びと表現できるよう取り組ませたい。
単元の評価規準	〈知識・技能〉 ① SDGs は地球に生きる全員が目指す目標であり、そのために身近な生活や今の自分の考えを見つめ直さなければならないことについて理解している。 ② 他者と共に課題を追究し、「身近で不要になったモノ」から課題を発見し、SDGs との関わりについて比較したり分類したりしている。 ③ 地球に住む一員として SDGs の目標達成に向けて取り組もうとすることは、未来の自分たちの生活につながっていることや自己の生き方や考え方に関わることであることに気付いている。 〈思考・判断・表現〉 ① SDGs の理念や目標を踏まえ、全ての人にとってのよりよい生活を想起していく中で生じた疑問や感じたことから課題を見付け、解決に向けて自分にできることを考えている。 ② 優先的に取り組むべき課題について、収集した情報から適切に選択している。 ③ 「身近で不要になったモノ」から得られた情報と地球上の課題とを関連付け、課題の解決に向けて他者と協働しながら整理、分析している。 ④ 他者と共に課題を追究し深め合った考えを基に、形や色彩、イメージを用いてピクトグラムでアイコンを表現したり、考えたことや新たな課題などを適切に文章でまとめたりしている。 〈主体的に学習に取り組む態度〉 ① 世界中の様々な人の生活や立場、考えを理解し、課題に対して自分の考えを深め、解決に向けて意欲的に取り組もうとしている。 ② 他者の考えと比較し、参考にしながら、自他の考えの良さを生かして課題の設定をしようとしている。 ③ SDGs の理念や目標を踏まえ、全ての人にとってのよりよい生活を目指すため仲間と協力しながら対策や解決方法を見出し、それを基に今後の自己の生き方と結びつけて考えようとしている。

次に「総合的な学習の時間」の「展開」に当たる No.3 の表を挙げる。その際、連続で行った 1 回～2 回の「学習指導案」は表 8 に示し、4 回目の授業に関しては「授業展開資料」を表 9 に示す。なお、3 回目の授業は、2 回目の授業の続きとして SDG18 の完成を目指す活動を主とし、その後は、国際連合広報センターが公開する「ゴー・ゴールズ！」の実践であったため、これに関する学習指導案の掲載は省いた。

表8　「総合的な学習の時間〔1回～2回〕」学習指導案 No.3

過程	学習内容　学習活動	・指導上の留意点 観点：具体の評価規準【評価方法】 ■ 努力を要する生徒への手立て ◇ 主体的・対話的で深い学びを追究する手立て
導 入 5分	① 本時の単元名を確認。 ② 持ち物の確認。 ③ ACジャパンの「おむすびころりん、1億個」の動画を視聴する。 ④ SDGsの概要を知る。	・本時はSDGsに関する内容について学習する単元であることを確認させる。 ・「不要になったモノ」を持参できたか確認させる。 ・身近なテレビCMがSDGsに関わる内容であることに気付かせる。 ・『世界がぐっと近くなる SDGsとボクらをつなぐ本』より引用し、できるだけ分かり易くかみ砕いた表現で語るようにする。
	学習課題：私たちの世界をよりよい場所にしていくには、どのようなことが必要なのだろう。	
展開(1) 20分	⑤「SDGsって何だろう」を学習する。	・SDGsの17の目標から抜粋して五つを紹介。SDGsが生活のあらゆる面に関わる目標であることを理解させるため、貧困、環境、ジェンダー、平和など、多岐に亘るテーマをバランスよく取り上げる。 ・日本の目標達成状況や世界でのランキングについて予想させる。 ・2020年、2019年の結果を紹介し、日本の状況について理解を深める。達成できている目標はわずかであることに気付かせる。 ・世界のランキング〔全166カ国〕から、どのような国が上位、下位に集中しているのか、特徴を考えさせる。 ・国連には193カ国程が加盟しているにも拘らず、ランキングには166カ国しか挙げられていない理由について考えさせる。 ・身近なSDGsについて、普段の生活から想起させる。 レジ袋の有料化、エコバッグ使用、プラスチックストローの廃止、食品ロス削減、アンケート用紙等の性別記入欄の改変 等 ・それぞれの取組がSDGsのどの目標と関わりがあるのかを考えさせる。関わりがある目標は一つではなく、目標同士が互いに関連していることにも気付かせる。
展開(2) 20分	⑥「SDGsランキング」をつくる。	・SDGsの17の目標から、優先したいベスト3を選ぶ。順位と選んだ理由をワークシートに記入させる。 ◇ タブレットPC〔ムーブノート〕に1位に選んだ目標を書き込み、全員の1位を共有する。多様な意見があることを理解させる。 ■ 自分が優先したい目標、あるいは、世界中で協力して優先して取り組みたい目標、そのどちらの視点で考えてもよい。 思・判・表 ② 優先的に取り組むべき課題について、学習した内容や収集した情報から適切に選択している。【発言・タブレットPC・ワークシート】
展開(3) 25分	⑦「身近なモノから考えよう」について班で対話的な学習を行う。 アクティブタイム〔「対話的学習の時間」の呼称〕 【カルテット〔4人班〕・比べ合う・高め合う】	・どのようなモノを持ってきたか紹介し合い、「不要になったモノ」にはどのようなものがあるのかを確認させる。 ・不要になった理由毎に分類し、モノがどのような理由で不要になっていくのかを考察させる。 ・それぞれSDGsとの関わりがあるか話し合う。関わりのある目標は一つではないことに気付かせる。 ・不要にしないための解決方法や対策はあるか、多様な視点から話し合わせる。 ■ 不要になってからの解決策だけではなく、モノを生産する時点や購入する時点のことから解決方法や対策を考えさせ、そこからSDGsとの関わりも広い視野で捉えさせていく。 ◇ 他者と解決策を探る過程でどのような気付きや課題が見付けら

		れたか、アクティブタイムで深めた考えや学びを振り返る。 思・判・表 ③「身近で不要になったモノ」から得られた情報と地球上の課題とを関連付け、課題の解決に向けて他者と協働しながら整理、分析している。【話し合い・ワークシート】
展開(4) 25分	⑧ 私のSDG ～18番目の目標～	・SDGsに18番目の目標を掲げるとしたらどのようなものか、これまでの学習から、多くの人に呼びかけ共有していきたい内容を検討させる。 ・アイコンの制作のため、ピクトグラムの説明をする。ピクトグラムは、美術の要素である形と色彩で構成されていることを指導し、形や色彩を手段として自分の思いを表現させる。 ・色ペン、色鉛筆で表現させる。1色で表現することが望ましいが、多色で表現したい場合はそれでもよい。 ・アイコンに込めた願いや意味などを、形や色彩、イメージを通して文章で説明させる。 ■ アイコンの制作は技能評価ではなく、どのように形や色彩、イメージを通して考えたのかが重要であるため、技能面の巧拙は心配せず制作させる。 思・判・表 ④ 他者と共に課題を追究し深め合った考えを基に、形や色彩、イメージを用いてピクトグラムで表現したり、考えたことや新たな課題などを適切に文章でまとめたりしている。【ワークシート〔アイコン〕】
まとめ 5分	⑨ 本時の振り返り 振り返り	・進度を確認し、次回はアイコンの完成とSDGsのすごろく「ゴー・ゴールズ！」を行う時間であることを連絡する。 知・技 ① SDGsは地球に生きる全員が目指す目標であり、そのために身近な生活や今の自分の考えを見つめ直さなければならないことを理解している。【ワークシート〔振り返り〕】

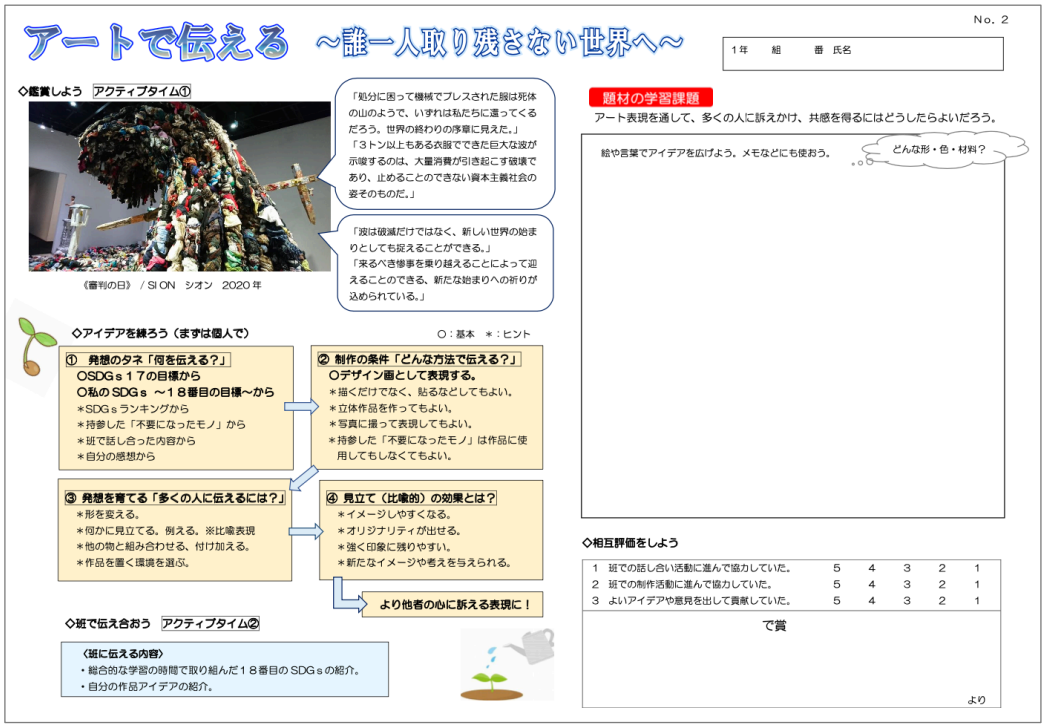
表9 「総合的な学習の時間〔4回〕」授業展開資料

過程	・学習活動 ○指導上の留意点 ＊検討事項
準 備	**〈教員〉** 大型テレビ、教員用パソコン、スライド資料、HDMIケーブル、プリント2種〔「プレゼンテーションで伝えよう」「アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～」〕、感想用紙。 **〈生徒〉** プリント「プレゼンテーションで伝えよう」〔美術科用〕を配布しておく。 プリント「アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～」〔美術科用〕を配布しておく。
導 入 3分	○本時は1月に行った「総合的な学習の時間」の「SDGsでつながる ～誰一人取り残さない世界へ～」の学習を生かして「美術科」で取り組んだ「アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～」の作品プレゼンテーションの時間である。〔「アート表現を通して、多くの人に訴えかけ、共感を得るにはどうしたらよいだろう」という学習課題で、協働で4時間で取り組んだ作品。〕 学習課題：多くの人に作品の魅力を伝え、みんなの作品からよさを感じ取ろう。
展開(1) 30分	・1班から順に、各班3分間でプレゼンテーションを行う。作品は教卓に立て、一人が支える。 ・当日欠席者の担当分も必ず分担して発表する。 ○タイマーはセットしなくて良いが、時間はチェックしておく〔3分程度〕。 ○作品タイトルをスライドで表示。スライド表示の操作は生徒自身が行う。 ○「美術科」では「完成予想図」までを制作したが、実際に立体作品を作った班もある。その班は立体作品や写真も併せて示す。 授業例１ ・プレゼンテーションを行う。 ・発表した班の次にプレゼンテーションを行う班〔員〕が質問や感想を言う。

	授業例２ ・プレゼンテーションを行う。 ・クラス全体で質問タイムをとる。 授業例３ ・プレゼンテーションを行う。 ・全班終了後、班毎に相談して最も共感できた作品を選ぶ。理由を述べる。 〇授業内容は、上記以外にもクラスの実態に応じて自由に工夫して設定してよい。
展開⑵ 12分	・相互評価を行う。プリント「アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～」〔美術科用〕の相互評価の欄を記入。プリントを班内で交換して互いのプリントに記入する。 〇4人で時計回りに回すなど、互いに交換するよう指示。 当日欠席者の分も記入する〔誰かが2人分記入することになる〕。
	〇感想用紙配布。 ・感想記入〔A5判〕。
まとめ 5分	提出物 ・作品 ・プリント「アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～」〔美術科用〕→班毎にまとめる。 ・プリント「プレゼンテーションで伝えよう」〔美術科用〕→各班から1部ずつ回収する。 ・感想用紙 〇担任教員による総括。

表 10　「美術科」学習指導案 No.1

題材名	アートで伝える ～誰一人取り残さない世界へ～				
時 間	4時間	対　象	中学校　第1学年	場　所	美術室
準 備	**〈教員〉**プロジェクター、スライド資料、ワークシート、四つ切り画用紙各班2枚、マジック12色セット、新聞、段ボール、木工用ボンド。 **〈生徒〉**教科書、資料集、不要になったモノ、ポスターカラー、色鉛筆、色ペン。				
資 料 〔出典〕	**①《審判の日》 SI ON〔シオン〕**<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamproject028/> シオンは韓国の大学を卒業後、日本に留学し京都市立芸術大学大学院美術研究科で博士号を取得し、その後、ニューヨークでの活動を経て、現在はポーランドを拠点に主に欧米で活躍しているアーティストである。MAMプロジェクトは、森美術館が世界各地のアーティストと実験的なプロジェクトを行うシリーズで、多様な現代アートのかたちを紹介するものである。《審判の日》は、「MAMプロジェクト028」に出品された新作である。 **② 海岸のクジラ作品　電通ジェイミーサイフー** <https://tabi-labo.com/281820/deadwhale-project> 2017年5月11日、フィリピンのリゾートビーチに突然姿を現した作品。環境保護NGO団体グリーンピース、電通フィリピンと新進気鋭の企業ジェイミーサイフー・グループの合併会社「電通ジェイミーサイフー」によるコラボ企画。プラスチックごみが引き起こす海洋汚染について世界に訴えるために行われた企画。2016年、ヨーロッパで発見された、30頭のクジラの死体から着想している。フィリピンは、2017年のASEANサミットの議長国である。一方で、前年12月にはクジラの死体が実際に砂浜に打ち上げられていて、海洋汚染の深刻化が問題となっている国でもある。 **③ 《ヒロシマという重石》 佐藤 卓** <https://shop.jagda.org/item.php?id=I00000773> ヒロシマ・アピールズ2015年ポスター。「ヒロシマ・アピールズ」ポスターとは、1983年に、第1回作品として、当時JAGDA会長であった故・亀倉雄策が《燃え落ちる蝶》を発表し、その後1989年まで、毎年JAGDA会員1名によってボランティアで1点ずつ新しく制作されたポスターのこと。分銅は、もともと天秤に掛けるための物。広島はかつて、天秤に掛けられ、原爆を落とされた。落とす側には理屈がある。この広島という分銅が、この作品では書類の上に載る大きな重石になっている。書類はあらゆる「理屈」を象徴していて、分銅が理屈の重石になっている。どのような理屈があろうが、やってはいけないことがある、ということを表現している。				

	④ 《不確かな旅》 塩田 千春 <https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/shiotachiharu/index.html> 《不確かな旅》は塩田千春によるインスタレーション作品。塩田千春は「不在のなかの存在感」というコンセプトを一貫して追究し、作品制作を行っている。この作品は、部屋の天井を覆うほどの繊細な赤い糸の先に、鉄枠で作られただけの船が結び付けられている。枠しか存在しない船はどこか不安定で、真っ赤な荒波に今にも飲み込まれそうな緊迫感が感じられる。しかし一方で、生命力あふれる大量の赤い糸は、この船に命を吹き込んでいるようにも見える。
目 標	アーティストの作品鑑賞や対話的学習から多様な考えに触れ、アート表現を通して SDGs を伝えるにはどのような方法があるか、協力して考えを広げていく。
1時限目の評価規準	・形や色彩、材料、全体のイメージや作風などから作者の心情について考えるなどして、見方や感じ方を広げようとする。〈思考力・判断力・表現力 等〉 ・形や色彩、材料、環境、全体のイメージなどを基に、どのように主題を表わすかについて考えようとする。〈思考力・判断力・表現力 等〉 ・他者の考えに関心をもち、班員と協力して主体的に制作活動に取り組もうとする。〈学びに向かう力、人間性 等〉
板書計画	題 材 名 学習課題 スクリーン〔模造紙〕 キーワード 見立て インスタレーション 振り返り
配布資料〔抜粋〕	

※ 省略した資料 No.1〔A3 判〕には、SDGs のロゴとアイコン、更に解説を挙げる。
また、上記資料は No.1 と共に、美術科の授業の全て〔1～4 回〕で使用する。

表 11　「美術科」学習指導案 No.2

項　目	内　容
題材について	**⑴ 生徒観** 第 1 学年では 1 月に「総合的な学習の時間」において、3 時間計画で「SDGs でつながる ～誰一人取り残さない世界へ～」を学習した。SDGs を通して世界を取り巻く課題に目を向け、それを身近な問題として捉え、対話を通して新たな課題を見付けていくという学習内容である。 学習を終えた生徒に対する調査では 90％以上の生徒が肯定的な回答をした。実際の授業では仲間と楽しみながら考えを深め、熱心に課題に取り組む姿が見られた。授業内容も生徒の思考を促すために、SDGs の知識を習得するのではなく世界が抱える課題を知り、それを自分のこととして捉えることを目的とした。そのため、SDGs ランキングをつくって互いの価値観を共有したり、身近で「不要になったモノ」を持ち寄ってそれを基に班で対話的な学びにより考えを深めたりして、自分たちで課題を見付け思考する授業とした。 更に、学習を深める手段として形や色彩、イメージなどの美術の力を効果的に用いて自分の考えを表現する、教科横断的な「私の SDG ～18 番目の目標～」に取り組んだ。SDGs に 18 個目の目標をつくるとしたらどのようなものか、アイコンをピクトグラムで表現する課題である。難易度の高さが懸念されたが、技能評価ではないためか、予想以上に伸び伸びと意欲的に取り組んでおり、手が止まる生徒はほとんどいなかった。形や色彩の表現を通して、アイコンにどのような想いを込めどのように思考したのかに気付くことができ、深められた考えを具体的に述べることができていた。美術の表現が他教科の学習を深める手段となることが確認できた。 **⑵ 教材観** 美術の学びを個人の中に留めず、より多くの人へ伝えるために他者と協働しながら表現することで、生徒は生活や社会の中で美術が活きて働くことを、身を以て実感することができる。 導入では、シオンの作品を、プロジェクターで投影して鑑賞する。鑑賞する作品《審判の日》は 2020 年 7 月から 2021 年 1 月にかけて、六本木ヒルズ内の森美術館において「MAM プロジェクト 028」の作品の一つとして展示されていた。《審判の日》は 3 トン以上もある衣服でできた巨大な波の中に、小型のチャペルや彫刻が設置されたインスタレーションである。シオンは、古着を取り扱っている会社の倉庫を訪れた際の印象を「処分に困って機械でプレスされた服は死体の山のようで、いずれは私たちに還ってくるだろう。世界の終わりの序章に見えた」と述べている。また、作品については「衣服でできた巨大な波が示唆するのは、大量消費が引き起こす破壊であり、止めることのできない資本主義社会の姿そのものだ」<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/ mamproject028/>とも述べている。その波の中に据えられた小さなチャペルは無力な存在のようにも、残された救済のようにも見てとれる。 作品鑑賞は対話型鑑賞の手法で行い、気軽に意見を出し合いながら互いの気付きや考えを共有させていく。ここでは、SDGs との関連に気付かせるため、作者の表現意図を明確に提示することとする。美術作品を通して他者に伝えるための意味や、その手法を学び、自分自身の表現に生かせることを目的としている。 本題材では「アート表現を通して、多くの人に訴えかけ、共感を得るにはどうしたらよいだろう」という学習課題を共有し、4 人一組の班で共同制作を行う。表現はアイデアスケッチを具体化した「完成予想図」とする。実際の作品を制作するのではなく「完成予想図」に留めることで発想の幅の広がりが期待でき、多様な表現方法の工夫も可能であると考える。使用する描画材料もポスターカラー、クレヨン、カラーペンなど、表現意図に合うよう幅広く選択させたい。更に、インスタレーションのように、作品単体ではなく展示する環境と関連付けて構想することもできる。可能な場合は実際に作品として制作したり、外に設置したり、写真で表現したりするなど、班で考える表現の方向性によって様々に選択できるよう、自由度の高い設定とした。その中で、より他者へ訴え共感を得るための表現について、仲間と共に試行錯誤させたい。 相互鑑賞は、プレゼンテーションの場を授業参観日の学級活動の時間に設定し、生徒の美術の学びを広く評価して貰う場とした。また、授業者の担任教員や参観している保護者にも生活や社会と美術との関わりや、美術表現の多様性に触れて貰う機会としたい。 協働で学ぶことで、他者と関わりながら一つの作品をつくり出す喜びを味わわせ、美術を通して他者に伝えるための多様な表現力やコミュニケーション力を身に付けさせたい。更に、生活や社会と美術との関わりを実感させ、生涯に亘って豊かな生活を創造していこうとする意欲を育んでいきたい。 **⑶ 指導観** 2 学期に行った「美術科」に関する調査で「美術館に行ったことはありますか」という問いに対して「ある」と答えたのは学年全体で 24％であった。この結果から、生徒は多様な美術作品を鑑賞した経験が少なく、発

	想が既習内容の範囲にとらわれてしまう可能性があることが分かる。そのため、特に「見立て」と「インスタレーション」について分かり易く学ぶ必要がある。「見立て」については、伝えたいことをそのまま表わすのではなく別のものに見立てることで、他者に、より強い印象を与えたり深く考えさせたりすることができることを指導する。見立てることの効果については、直接的な表現との対比を用いて説明することで理解を深めさせたい。「インスタレーション」については、これまで作品単体を制作する経験が多い生徒にとって、展示する環境と関連付けて構想することはやや困難に思われる。そのため、インスタレーションの参考例を示し、場所や空間全体を作品とすることで、体感的に作品を鑑賞することができたり、新たなイメージを与えられたりすることを指導する。「見立て」や「インスタレーション」などのように、他者に伝えるための多様な表現方法があることを十分に理解させたい。 「美術科」における共同での制作はこれが初めての題材となる。ここでは生徒同士がそれぞれの得意なことを行うことで協力し、それぞれの特性を生かした活動を展開する「協働」することを目的とする。「誰一人取り残さない」とする SDGs の理念にも重ね合わせ、一人も取り残すことなく 4 人で協働することに重点を置く。対話を重ねながら各自の発想と向き合い、自分自身との関わり方、他者との関わり方を探り、その中で互いの多様な価値観を認めそれを生かし合って一つの作品を生み出させたい。そのため、題材の振り返りは自己評価ではなく他者評価とし、他者の活動を適切に評価できる力も育ませたい。 他方、12 月から 3 月にかけては、全てのクラスでアーティストを招いて授業を行う「Artist In School」の取組を行い、アーティストからはドローイング表現によって、白い紙を恐れず、感じたことを感覚を生かして自由に表現することを学んでいる。この学びを生かして、本題材においては、伸び伸びと表現することを楽しませたい。 本題材や「総合的な学習の時間」に学んだ身近に感じた美術を、生徒自身が積極的に生活の中に豊かに関わらせることができるよう、指導に努めたい。
題材の評価規準	**〈知識・技能〉** 知　他者へ伝えるための効果的な方法や材料などの性質及びそれらが感情にもたらす効果、環境などの造形的な特徴を基に、全体のイメージで捉えることを理解している。 **〈思考・判断・表現〉** 発　SDGsに関わる想いを多くの人に訴え、共感を得るために、形や色彩、材料、環境などからイメージして主題を生み出し、形などが感情にもたらす効果や、他者へ伝えるためにどのように表わすかなどの方法を総合的に考え、表現の構想を練っている。 鑑　他者へ伝え共感を得るために構想されたデザインの造形的なよさを感じ取り、形や色彩、材料などから作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を広げている。 **〈主体的に学習に取り組む態度〉** 態表　美術の創造活動の喜びを味わい他者の考えに関心をもち、協力して主体的に主題を生み出し、創意工夫して表す表現の学習活動に取り組もうとしている。 態鑑　美術の創造活動の喜びを味わい、他者に伝えるための造形的なよさについて主体的に感じ取り、形や色彩、材料、全体のイメージや作風などから作者の心情や表現の意図と創造的な工夫について考えるなどして、見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。 ※ アンダーラインは〔共通事項〕に関連した内容を示す。
配布資料〔抜粋〕	〈第4回授業用 配布資料：プレゼンテーション用準備資料〔抜粋〕〉 ◇ プレゼンテーションとは、「売り込みたいテーマや企画について、効果的に説得するための技法」のことです。班の作品について、多くの人がSDGsとの関わりを感じ共感できるような、魅力的なプレゼンテーションを行いましょう。 原稿メモ 1　作品タイトル 2　どのSDGsと関わりがあるのか、このテーマを選んだ理由 3　どのようにこの作品が生まれたのか、作品を考えた経緯 4　作品に込められた想い・願い 5　作品の説明（見立て、インスタレーション）、平面か立体か、大きさ、素材、共感を得るための工夫等 その他：　上記1～5の項目は必ずプレゼンテーションに入れる。これ以外に、班で工夫して内容を加える。 方　法：　劇、質問形式、クイズ形式、感想インタビュー等、聞き手の興味をひくような工夫をする。 ※ 本資料は「総合的な学習の時間」の第 4 回の授業参観での発表資料としても用いる。

表 12　「美術科」学習指導案 No.3

過程	学習内容　学習活動	・指導上の留意点 観点：具体の評価規準【評価方法】 ■ 努力を要する生徒への手立て ◇ 主体的・対話的で深い学びを追究する手立て 〔共〕：〔共通事項〕に関わる内容
導 入 2分	① 本時の目標と活動内容の確認。 ② 持ち物の確認。	・本時は「総合的な学習の時間」で行った「SDGsでつながる ～誰一人取り残さない世界へ～」と関連した題材であることを理解させる。 ・「不要になったモノ」を持参できたか。 ・題材名を紹介し、ここでも「総合的な学習の時間」との関連学習であることを意識付ける。
展開(1) 12分	③ 《審判の日》/SI ON〔シオン〕の作品鑑賞。 アクティブタイム 【フリー〔班員に限らず交流〕・見付け合う】	・《審判の日》/SI ON〔シオン〕の作品鑑賞〔スクリーンに投影〕。 ・クラス全体で鑑賞するため、スクリーンに寄るように指示をする。 ◇ 対話型鑑賞の手法で意見を出し合い、互いの考えを共有させていく。 〈鑑賞の視点①〉 ・何がある？ 何でできている？ ・どのような風に見えた？ ・どこからそう思う？ ・どのようなことを伝えたいのかな。 ・SDGsとの関連に気付かせるため、作者の表現意図を明確に示す。 〈鑑賞の視点②〉 ・SDGsの17の目標のどれと関連がありそう？ ・関連のある目標は一つではないことに気付かせる。 鑑 形や色彩、材料、全体のイメージや作風などから作者の心情について考えるなどして、見方や感じ方を広げている。〔共〕【発言、観察】
	学習課題：アートでSDGsを伝えるにはどのような方法があるだろう。	
展開(2) 15分	④ アイデアを練るための方法を学ぶ。 ⑤ 個人でアイデアを練る。発想の手がかりなどを基に、ワークシートにアイデアを記入していく。	アイデアを練ろう（まずは個人で） ① 発想のタネ「何を伝える？」 ～誰一人取り残さない世界へ～ ・SDGsの17の目標 ・私のSDG ～18番目の目標～ ② 制作の条件「どのような方法で伝える？」 ・「完成予想図」として表現する。 ③ 発想を育てる「多くの人に伝えるには？」 ・「見立て」の例を示す。 資料② 海岸のクジラ作品　電通ジェイミーサイフー 資料③ 《ヒロシマという重石》 佐藤 卓 ・席に戻りワークシートを配布する。 ・まずは個人でアイデアを練らせる。 ・何を伝えるのかを明確にさせる。 ①〈発想のタネ「何を伝える？」〉　○＝基本 ○ SDGsの17の目標から ○ SDGsランキングから ・持参した「不要になったモノ」から ・班で話し合った内容から ・「私のSDG ～18番目の目標～」から ・自分の感想から

		・今回は「完成予想図」で表現することを理解させる。 ・更にどのような表現手段があるのかを確認させる。 ②〈制作の条件「どのような方法で伝える？」〉 ○「完成予想図」として表現する。 ・描くだけでなく、貼るなどしてもよい。 ・持参した「不要になったモノ」は、作品に使用しても、使用しなくてもよい。 ・立体作品を作ってもよい。 ・写真に撮って表現してもよい。 ・多くの人に伝えるには、どのような方法が効果的かを練らせる。 ③〈発想を育てる「多くの人に伝えるには？」〉 ・形を変える。 ・何かに見立てる。例える。　※比喩表現 ・他の物と組み合わせる、付け加える。 ・作品を置く環境を選ぶ。 ・ワークシートに個人の案を記入させる。 ■ シオンの作品等の鑑賞から、多くの人により共感させたり考えさせたりするには、伝えたいことを直接的に表現するのではなく、「見立て」〔比喩的〕の表現を用いていることに気付かせる。 〈「見立て」〔比喩的〕の効果〉 ・イメージしやすくなる。 ・オリジナリティが出せる。 ・強く印象に残りやすい。 ・新たなイメージや考えを与えられる。 ■ アイデアが浮かばない場合は、形と色彩とイメージから表現している18番目のSDGを参考にさせる。 発 形や色彩、材料、環境、全体のイメージなどを基に、どのように主題を表わすかについて考えている。〔共〕【ワークシート、観察】
展開(3) 18分	⑥ 班で互いのアイデアを発表し、共有する。 アクティブタイム 【カルテット・伝え合う】 ⑦ 班の作品の方向性を話し合う。 アクティブタイム 【カルテット・高め合う】	〈班員に伝える内容〉 ・「総合的な学習の時間」で取り組んだ18番目のSDG。 ・自分の作品アイデア。 ・「インスタレーション」の例を示す。 資料④《不確かな旅》　塩田　千春 ◇ 発表で共有した互いの考えから、よりよいアイデアを検討していく。 ・どのような案にするか、必要な物や表現方法など、詳細を決め、役割分担をする。 ■ 安易に一つの案に絞るのではなく、複数の案を組み合わせることでアイデアを深められることを指導する。 態 他者の考えに関心をもち、班員と協力して制作に取り組んでいる。【観察】
まとめ 3分	⑧ 本時の振り返り 振り返り	・班で決まったことを確認し、次回、制作に必要な用具や材料等を持ってくるように連絡をする。 例：ポスターカラー、鉛筆、色鉛筆、ペン、クレヨン　等

４. 授業分析

4-1 総合的な学習の時間

「総合的な学習の時間」の授業実施に先立ち、中学校の第 1 学年の担任教員〔6 人〕と本教材の開発者である「美術科」の教員が、原案となるスライド資料に基づき 150 分程度の協議を行い、授業内容及びスライド資料に改善を加えた。また「総合的な学習の時間」に関わる授業は、全 6 クラスが同時間に、スライド資料に基づき、各クラスの担任教員が各教室で実施した。

授業後、担任教員に行った書面調査では三つのことを質問し、次のような回答を得た。

まず、生徒が〔悩んだり考えたりと〕思考した場面を 2 場面まで尋ねた質問に対しては、全てのクラス担任教員が、2 校時目に個人と班での学習を行った、身近なモノから考える場面を挙げ、続いて 4 人が、18 番目の SDG の考案の場面を挙げた。また、その理由の回答は｛⑴ 不要なモノにしないための対策や「不要になったモノ」の活用法を考えることは、今後の生徒自身の生活と密接に関わる点、⑵ 事前学習として宿題で生徒自身にとって不要なモノについて考える段階があった点｝にまとめられる。

次に、授業に「不要になったモノ」を持参した効果を尋ねたところ、6 人全員が、効果があったと回答し、その理由としては｛⑴ 目前に実物があることで班員全員が自身の考えを表明することができ、モノとそのモノに対応した他者の考え方を知ることができる点、⑵ モノに対する多様な考え方があることを理解できる点｝が挙げられた。

最後に尋ねた「感想」には｛⑴ 教員にとっても SDGs を学ぶ機会になった、⑵ 逡巡していた SDGs の授業実践への弾みとなった、⑶ 従前の SDGs の教材とは異なる視点に基づく内容であり、新たな教材と位置付けられる、⑷ 授業時間が更にあれば、より楽しくより充実した授業になる、⑸ 生徒が自身の生活に関わることとして考え、将来についても考えるきっかけになっていた、⑹ 授業後に生徒自らが SDGs を話題にしている姿を見て、学習内容の理解が深まっている印象を持った｝が挙げられた。これらの感想から、本教材が、上記のホールスクールアプローチとしても有効であることが推測された。

生徒が考案した 18 番目の SDG について、全クラスの生徒が案を記したワークシートを調査した結果を後掲する表 13 に示す。

表 13 に見られる通り、生徒が考案した SDG はいずれも、既にある 17 の SDGs を含むと共に複数の SDG に跨っていた。また、No.1「生産・所有への責任」及び No.2「資源の保護」が多かった理由には「不要になったモノ」を持参したことが影響していると考えられるが、No.3～No.6 の｛個人の自由、人間関係、情報伝達、平和｝に関する内容が複数見られた理由には、SDGs の学習が、生徒にとって、自分自身でもある「人間」に関わる問題と捉えられたことがあると考えられた。更に、No.7「健康・福祉」は、COVID-19 の災禍を経験したことが理由にあり、また No.8「政策」に関しては、近年の東日本大震災に関わる原子力発電の問題や、政治家や官僚の相継ぐ不正問題が念頭にあると考えられた。同様に、No.4 の回答に見られる「白人の考えが変わること」についても、米国での事件の報道を受けた思考の結果であることが、ワークシートから理解できた。

なお、実際に「不要になったモノ」を見ながら議論を展開した内容と考えられた、No.1「生産・所有への責任」に関する記述を見ると、不要品を軸に、過去と未来の両方に対する回答があり、過去に関しては購入時の責任を、未来に関しては使用する責任を挙げている点に、学習指導案で想定した通りの議論の深まりが見られた。また、No.4「人間関係」に関しては「殺人を無くす」や「『要らない人』を無くす」等、哲学的な命題とも捉えられる記述があり、現代の中学生が直面する人間関係を理解する手掛かりになる視点を得た。

表 13　生徒が考案した SDG18

No.	項 目	回　答	関連する SDGs の No.
1	生産・所有への責任	ペットを捨てない、要らなくなった物は他人に上げる、ポイステしない、リサイクルして使えなくなるまで利用する、無駄な物は買わない、無駄な物は生産しない、不要を必要にする、将来も使う物を買う、お金の使い方に気を付ける、新しい物に迂闊に名前を書かない	4、9、12
2	資源の保護	永遠に住める地球を維持する、電気を大切にする、自然を増やす、プラスチックを削減する、川の豊かさを守る、川を綺麗に保つ	3、4、6、7、9、11、12、13、14、15
3	個人の自由	他人の目を気にせずにしたいことをする、全ての人に適度の自由を与える	4、5、10、16、17
4	人間関係	思い遣りの心を持つ、個性を認め合う、人間を大切にする、左利きの人に優しくする、貧しい人を助ける、人を見た目で判断しない、殺人を止める、有難みを持つ、白人の考えが変わること、「要らない人」を無くす	1、2、4、5、10、11、16、17
5	情報伝達	約束を守る、誤った情報を発信しない、自分の言葉に責任を持つ、悪口やイジメを無くす、Web 上に悪口を挙げない、スマホの使い過ぎに注意する、人の意見を聞き入れる、自分の気持ちを届ける、一つの行動で色々な人が悲しむ	3、4、11、16、17
6	平　和	人々に笑いを、皆が笑顔で生活できる世界にする	1、2、3、6、7、8、10、11、13、14、15、16、17
7	健康・福祉	人の命を守るため距離をとる、体を動かす時間を持つ、虫歯を無くす、医療の発達	2、3、4
8	政　策	税金を娯楽目的に使わない、燃料使用制限化	全て

4-2 美術科

「美術科」の授業〔各クラス 4 時間〕については、全て「美術科」の教員が担当したが、本教材の成果物である「完成予想図」が 4 時間の授業時間中に完成しない場合は、教員が在室する昼休みに、美術室での制作を認めた。

「美術科」の授業は、多くがアクティブ・ラーニングであったこともあり、クラスの雰囲気によって制作の進度が異なり、成果物に使用する材料や用具もクラス毎に傾向が異なった。一方で、いずれのクラスでも平面に固執せずに制作をする班が見られたり、「図画工作科」や「美術科」で学んだ技法や材料・用具を活用する姿が見られたりしたが、これらは美術教育においても、既習内容が蓄積されていることが認められる場面と捉えられた。

今回「美術科」の教材開発に際し特に検討を行った点は 2 点である。1 点目は、班員で制作する成果物を「完成予想図」とするのか完成作品とするのかという点、2 点目は、班員で制作する成果物は、17 の SDGs から選ぶのか、生徒各自が考案した 18 番目を含めた SDGs から選ぶのかという点である。この 2 点については「総合的な学習の時間」の授業を行ったクラス担任教員と「美術科」の教員とで協議を行い、その結果、上掲の学習指導案に示す通り、1 点目は「完成予想図」とし、2 点目は、生徒各自が考案した 18 番目を含めた SDGs から選ぶこととした。しかし、そのため授業では「完成予想図」と完成作品とを混同する班があったり、班で「完成予想図」に採用する作品を選ぶ際、班員同士が自身の 18 番目の SDG の作品を推して競争が起こったりしたが、こうした場面は、今回の教材が、班員間で様々な協議を行うことを目的にしている点において、上記の授業内容が、有意義な協議テーマになったことを裏付ける場面であると理

解できた。実際、そうした場面の後には、成果物の「作品」が何であるかを班員で共有することを目指したり、班員で合意できる成果物にするために、個々の 18 番目の SDG の競争の視点を昇華させることに成功し、新たな成果物を生み出したりする姿が見られた。

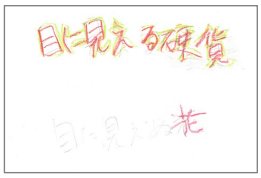
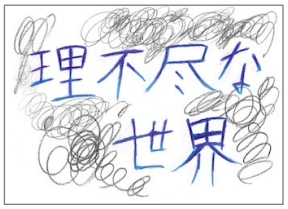
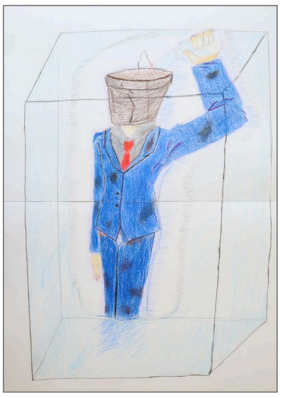
なお、本教材の特徴の一つは、材料や用具の使用方法や技法に関して、教員が新たに教授する内容が無いことである。他方、班員と協議を行って協働して制作を行う授業形態と、参考作品を通して「見立て」と「インスタレーション」の意味を理解し制作に取り入れるようにするための指導も、本教材の特徴と言える。また、本教材の最後の授業に当たる「総合的な学習の時間」は、授業参観日に設定し、保護者に対して、各班が順に、完成した「完成予想図」についての発表を行ったが、その際には、完成品に取り入れる「見立て」と「インスタレーション」に関する内容の説明を含めて発表することとした。その結果、生徒は元より保護者においても、美術を初めとして社会のあらゆる場面に見られる「見立て」や「インスタレーション」への関心を高め、その概念の理解を深められることを目指した。

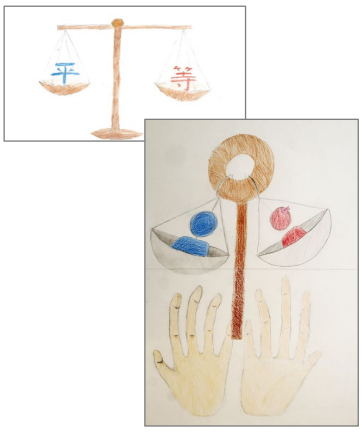
各班の制作の様子からは、どの班においても一人の班員も溢れることなく、協力して制作を行う姿が認められた。例えば、全員で合意を得て制作が進められるように、描く内容を予め打合せて付箋にそれを記して制作を開始したり、手持ち無沙汰な様子の班員が在れば、その班員に対して制作箇所や制作内容を指示したりする姿が見られた。また、班員同士の会話に関しては、どの班でも多くの会話が行われていたが、制作内容以外の話題は一切無く、更に、各生徒が自身の意見が言える自由な雰囲気があった。

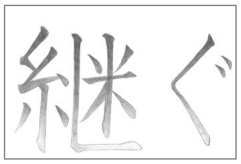
次の表 14 には、A～I の 9 種類の「完成予想図」〔一部に「タイトル画」も上段に示す〕及び「発表資料」を掲載する。なお「SDG」の欄には「完成予想図」に表した内容と関連する SDG の番号を示す。

表 14　「完成予想図〔作品〕」及び「発表資料」

SDG	完成予想図〔作品〕	発表資料
15	 	A《密とソーシャルディスタンス》 15番の陸の豊かさを守ろうというSDGと関わりがあります。レジ袋の有料化やスプーン・フォークも有料化となりそうな今。 近年、急激な都市化が始まり、木々の伐採や環境汚染があり、環境問題への深刻さが深まりました。クイズです。「今、日本だけで自然を残す活動が行われています。」○か×かを、顔の前に出して下さい。正解は×です。世界中で行われています。 木々の少なさと、伐採された木の多さについて伝えたく、育っている木と切株を隣り合わせにしました。本物の木を貼りリアルに見せたり、レジ袋を貼って用途を考えたりしながら作りました。私たちが、この作品に込めた想いは、次のどれでしょう。 1. 木々、自然を大切にして欲しい。 2. 自然そして環境問題に取り組んで欲しい。 3. 木も人と同じで仲良く接して欲しい。 正解は、1及び2です。 それでは、作品について説明をします。これは立体作品です。私たちのタイトルは「密とソーシャルディスタンス」。密には、木が沢山育っている様子を見立て、「ソーシャルディスタンス」は切株でイメージしました。この作品のポイントは二つあります。一つ目は素材を使用したことです。木やレジ袋を使って実際のことを伝えるようにしました。二つ目は、画面の上にいる青とオレンジの鳥です。また、切株の方にも、木々が沢山育って欲しいとの思いで描きました。 この作品を、学校の渡り廊下や木がよく見える場所等に置くことにより、木について沢山考えて欲しいと思っています。この作品で、少しはこの自然や木々の減少のことについて考えて欲しいと思います。

5 10	 	B《目に見える硬貨 目に見えぬ花》 この作品は、平等とは何か、ということを考えてできました。この作品の大きさは50cm、横幅60cm程の立体作品です。 この作品のタイトルは「目に見える硬貨と目に見えぬ花」です。何故花はあるのに見えないのでしょうか？　花は様々なものの尊さの具現だからです。そして、天秤の片方の皿が取れているのは、目の前に金銭に囚われ、道徳的なことを正しく天秤にかけることができていないのではないかという考えからです。 厳正な測定をするイメージから、天秤は、洋風のやや立派な室内で、白いクロスが敷かれたテーブルの上に載せてあります。天秤は金で作られていることを想定しており、正式な計量をしていることを表します。載っている貨幣はどこかの国のものと決めている訳ではなく、様々なコインです。また、載っている百合の花は、純粋や潔白さを表しています。 この作品は、人や国の不平等を無くそうという、10番目のSDGと関係があります。 みなさんも、目の前の自分の手に入る利益だけを見ず、一度正して天秤に利益と道徳を掛けてみて下さい。人への思い遣りは、いずれ自分の良いことにも繋がるのがお決まりですよ。
1 3 6 8 10 16	 	C《理不尽な世界》 タイトルは「理不尽な世界」です。この作品は、他の人たちとは違う自分に劣等感を抱えている貧しい男の人が主人公となっています。 関わりがあるSDGsは1、3、6、8、10、16番です。この作品が生まれた経緯は、何故、一生懸命に働いている人が報われないのか、周りは満たされているのに、どうして自分は満たされないのか、という理不尽な社会で生きる男の人を表しました。また、このような人が増えているという事実があります。そのため、沢山の人に知って欲しいと思いました。 このテーマを選んだ理由は、現在、沢山の人の生活がどんどん苦しくなっていますが、その人たちの実感を得て、全ての人が幸せに暮らせるようにして行きたいと考えたからです。特に、10番目の目標「人や国の不平等を無くそう」と１番目の「貧困を無くそう」に深く関係しています。 この作品へは、理不尽に働かされている人が多くいる社会が少しでも変わって欲しいという願いが込められています。 この作品には、一つの部屋に汚れたマネキンが置いてあり、膝まで水に浸っています。また、水色の部分は水が入っていて、満たされているのですが、白い所はガラスで仕切られていて、マネキンに水が入って来ない構造になっています。工夫した所は「スーツを少し汚して貧しさを表したマネキン」の周りにある水で、自分以外が満たされている空間を表現した点です。高さは180cmです。
1 16 17	 	D《色をつけよう!!》 みなさんは“いじめ”と聞いて、どのようなことを思い浮かべますか？悪口？　暴力？　それとも仲間外れ？　考えれば考えるだけ出て来ます。私たちは、そんな身近ないじめというテーマでジェンダー問題、平和と公平を全ての人に伝えるために作品を作りました。題して「色を付けよう!!」 まず、この世には二つのグループがあります。「陰」と「陽」です。簡単に説明すると「陰キャ」〔内向的な性格の人〕と「陽キャ」〔外向的な性格の人〕です。その二つのグループのイメージに縛られることなく、自分の好きなように自由に生きて行きたいという思いが、私たちにはあります。 次に、こちらをご覧下さい。先程の二つのグループの人をペットボトルで表しました。黒いお皿に載っている透明なペットボトルが「陰キャ」。赤青緑の個性のあるペットボトルが「陽キャ」。暗い所で独りぼっちな人を救うために黄色のペットボトルが手を差し伸べてくれます。ペットボトルの量や、距離感も、現実味があるようにしました。 今から私たちが、独りぼっちに手を差し伸べたいと思います。（液を入れる）独りぼっちな人にも個性で自由に生きて良い。これが私たちの伝えたいことです。

5 10		E《平等》 この作品のタイトルは「平等」です。 まず、命の重さを題材に決め、人と命の重さを合わせられないかと考え、手の上に天秤を描きました。男女格差が無くなって欲しいとの想いから、天秤で命の重さを表しました。 問題：この作品を見て、どのSDGsと関わりがあるか分かりますか？ 答えは「SDG5 ジェンダー平等を実現しよう」です。このテーマを選んだ理由は、例えば、警察官は男性の仕事のイメージが強いけれども、女の人でも男の人でも誰もが就ける仕事になって欲しいとの思いが挙げられます。 この作品は天秤を命に、掌を重さに喩えて完成させ、天秤の上に人を載せることによって、男女の差を埋められるようにし、天秤の長さも等しくなるようになるべく工夫しました。平面作品の中で、少しのアレンジを加えられないかと思い、右側を女性、左側を男性とし、掌の濃さの違いを利用して、もっと深く男女を表しています。
14	 	F《近い未来》 私たちは海の豊かさを守るために、この作品を作りました。この作品は「未来の海」というフレーズに沿った作品で、海に流れるゴミを減らすことを考えました。 海に使った物は、ペットボトル、鳥に使っているのは段ボール、木の実にはペットボトルのキャップを使っています。 海に使われているペットボトルでは、人々が海へゴミを捨て過ぎた結果を表しています。段ボールの砕片を用いて、風で飛ばされ木に引っかかってしまったゴミを表しています。また、木に付いている実は、段ボールかペットボトル等で表し、十分には〔汚染の〕影響を取ることができなくなってしまったことを表しています。 海を綺麗に保つためにはどうしたら良いでしょうか？　私たちはまず海にゴミが流れてしまわないよう、普段から意識することが大切だと思います。しっかりリサイクルに出すことも一つの手だと思います。この作品をどこかに置くとしたら立体作品とし海があるような広い所だと思います。
2 12 13 15	 	G《ミライハカイ》 この作品のタイトルは「ミライハカイ」です。タイトルには、分別せずにゴミを捨てるのを止めようという意味を込めています。 この作品とSDGsの関係は、2番の飢餓をゼロに、12番のつくる責任・つかう責任、13番の気候変動に具体的な対策を、15番の陸の豊かさを守ろう、の四つです。 このテーマを選んだ理由は「2030年には地球が二つ必要」になると言われているからです。この作品を考えた経緯は、ゴミ箱に地球が捨てられているアイディアから食べ物や植物等を付け足して作品が完成しました。 それではクイズです。 第1問：家庭科で学習したことです。人は一人当たり年間何kg服を買い、何kg捨てているでしょう？ ①3kg買って2kg捨てている、②10kg買って9kg捨てている、③6kg買って4kg捨てている。（答え：③） 第2問：次の公害病の内、大気汚染が原因だったのはどれ？ ①水俣病、②イタイイタイ病、③四日市ぜんそく（答え：③） 第3問：この100年間で日本の平均気温は約何度上がったでしょう？ ①上がっていない、②1度、③5度（答え：②） 第4問：海面水位の上昇が続くと沈んでしまう国は？ ①ニュージーランド、②日本、③ツバル（答え：③） この作品は、外に置いたり普通のゴミ箱の隣に置いたりして、そのゴミ箱の持つ意味が感じられるようにしました。また、みんなに共感して貰えるように、身近にあるような物で伝えました。立体にして作ってみました。 最後に作品に込めた想いや願いについて。ただただゴミを捨てるだけでなく、ゴミの分別をしっかりとしましょう。また、森林を無くしたり、食べ物を粗末にしたりして、環境破壊をしないで下さい。

2 3 11 12	 	H《1匹から》 私たちの作品はコチラです。タイトルは「1匹から」です。その理由は、SDGsのサブタイトル「誰一人取り残さない世界へ」このタイトルの規模を、一人から1匹という小さい単位に変えて行こうと考え作ったからです。 この作品に関わるSDGsは、11番、12番、また、1匹という単位では2番、3番にも関わります。みなさんの飼っているペットは育児放棄せず、保健所にいる行き場のない犬や猫・動物を保護して欲しいということを願って作りました。 ここでみなさんにクイズです。 第1問：日本の保健所、動物保護センターでは1日でどの位の犬や猫が殺処分されているでしょう？ ①約50匹、②約100匹、③約1,000匹 正解は②の100匹です。これは年間で考えると約38,000匹です。とても多いことが分かりますね。 次は兎雑学のクイズです。兎は基本的に鳴きません。なぜでしょう？ ①鳴く習慣がないから、②声帯が無くて鳴けないから、③口が小さく鳴けないから（正解：②） 何故、この動物〔「完成予想図」の中を指で指す〕を兎にしたのでしょう。それは、兎には「寂しい」と死んでしまうという有名な話があるからです。そこから、インパクトを与えるために兎を採用しました。更に、伸びている手では保護するということを、また、兎の土台である地球では、世界中に沢山保護の必要な動物がいることを表しています。
12 13 14 15 17	 	I《継ぐ》 この作品は“継ぐ”というタイトルの平面上の作品です。私たちはSDGsの12、13、14、15、17等の「環境」と「協力」をテーマに作成しました。何故かと言うと、近年では、森林火災や地球温暖化等の環境問題についてのニュースがよく報じられるようになりましたが、そこから、少しでも多くの人に、危機感を持ち、協力の大切さについて、作品を通して伝えたいと思ったからです。 この作品は、グループでの話し合いの中で、共通して挙げられた「環境」「ハート」「協力」というワードが入るように、構図等を考えた結果から生まれました。 今回テーマにした「環境」には多くの課題があります。その課題は、誰か一人が必死に取り組んでも解決できるものではありません。全ての人々が協力して取り組まなければならないのです。そのことを伝えるために、水や土が無いと成長することのできない木々を作品に取り入れました。そこには協力をして、立派な未来にしようという願いが込められています。この作品の中の「ハート」は人間に、「階段」は時代に見立てました。 ハートたちが、今まで協力して守り継いで来た環境をこれからも守り、次の世代に継ぎ残して行こう、というメッセージも込められています。 最後に、何故こんなに「環境」や「協力」というワードを連呼したのかと言うと、みなさんに、少しでも、今の地球の課題やその重大さのことを意識して欲しかったからです。これからも感謝の気持ちを忘れずに、地球に優しく、思い遣りのある生活をして行きましょう。

発表会に先立ち、第1学年の担任教員と本教材の開発者である「美術科」の教員とで、上掲の表9の「授業展開資料」に基づき30分程度の打合せを行った。

表14が示す通り、発表会では多岐に亘るテーマの発表が見られた。中には「天秤」や「手」等、同じ物をモチーフにした内容の発表があったが、その場合も、B《目に見える硬貨 目に見えぬ花》とE《平等》のように、天秤が測る内容が両者で異なる等、表現の意図は異なっており、全く同じ内容では無かった。また、D《色をつけよう!!》やG《ミライハカイ》のように「完成予想図」が完成した後、実際に「作品」を作り、校内の特定の場所に置いて写真撮影をした班も見られた。更に、発表時に大型テレビに投影したタイトル画については、E《平等》やF《近い未来》のように、「完成予想図」とタイトルのデザインを揃えたり、I《継ぐ》のように、タイトル画にレタリングを用いたりする等、過去に学習した「図画工作科」や「美術科」の内容が活用されている画面も多数見られた。なお、多くの班の発表資料に見られたのがク

イズであるが、その問題には、表中に記す通り「社会科」や「家庭科」で習得した知識から時事問題まで、様々な内容が見られた。加えて、A《密とソーシャルディスタンス》の「完成予想図」における「密」及び「ソーシャルディスタンス」の「見立て」の説明のように、既製品や既成物に関する見立てに留まらず、創造した形を何かに見立てるといった、独自の見立てを行った班も多く見られた。

授業後に行った、第1学年の担任教員への調査の結果からは、教員自身が、教科横断的に学習することの良さや意味、協働することの必要性について理解したこと、更に、各教員がSDGsに関する授業の内容を｛学級、学年、学校｝通信等で保護者に対して積極的に発信したことが分かった。具体的には「当初は学習内容の難しさへの心配があったが、学習成果を見て、生徒の持つ可能性を感じることができ、生徒がここまでやり切ったことや予想以上に子どもたちの能力が発揮されていたことに感激した」「美術は苦手でよく分からないが、美術を通してこういう方法で表現し、伝えることができるのかと納得した」「美術の生活への関わり方が理解できた」といった回答があった。また、他の教員への調査からは、本教材に興味を持ち、第2学年でも「総合的な学習の時間」で同じ授業を実施したことや、SDGsの授業を既に実施している「社会科」及び「家庭科」の教員が本教材に関心を抱いたことが分かり、「総合的な学習の時間」を参観した校長からは「子どもが学ぶための環境をしっかり準備すれば子どもは必ず一生懸命取り組む」との評価が得られた。

５. 教材分析

上記の通り、本教材は「総合的な学習の時間」と「美術科」との「合科的な指導」を用いる教材であるが、本章では、これら2種類の授業を全て併せて一つの教材と捉えた上で、本教材を授業形態及び授業内容に関わる｛合科的な指導、アクティブ・ラーニング形態、見立て、インスタレーション｝の四つの観点から分析する。

5-1 合科的な指導

日本では「合科的な指導」に先立ち「合科学習」が実践されたが、「合科学習」とは、大正自由教育の隆盛期の1920〔大正9〕年8月より、奈良女子高等師範学校附属小学校で、木下竹次〔1872-1946〕を中心に始められた学習指導方法を指す。「合科学習」では、教科の別無く、生活即学習との立場から、学習材料は環境に求め、教員はその学習材料を整えることを中心に行い、学習は児童生徒が自ら内容を決めて行う自律的学習が行われた[21]。

一方「合科的な指導」は、1977〔昭和52〕年改訂小学校学習指導要領の総則の中で、初めて「各教科、道徳及び特別活動について、相互の関連を図り、発展的、系統的な指導ができるようにすること。なお、低学年においては、合科的な指導が十分できるようにすること」[22]と記されたが、これは、合わせる各種教科〔種類〕が統合され補完し合う関係で行われる指導を意味する[23]。但し「合科的な指導」については様々な方法があるとされ、例えば｛教科型合科的指導、生活課題型合科的指導｝に分類した上で、更に、前者「教科型合科的指導」を｛教科関連型合科的指導、教科融合型合科的指導、教科総合型合科的指導｝に分けて類型とする研究例もある[24]。

上記の通り「合科学習」は日本由来とされる一方、「合科」はドイツ語のGesamtunterrichitの訳語とされたり、また、アメリカでパーカースト〔Helen Parkhast, 1887-1973〕が、モンテッソーリ〔Maria Montessori, 1870-1952〕やデューイ〔John Dewey, 1859-1952〕の教育方法を参考に創り出した「個々の子どもが能力・要求に応じて学習課題と場所を選び自主的に学習をおしすすめることのできる『教育的実験室』

（Educational Laboratory）のプラン」[25]即ち「ダルトン・プラン〔Dalton Plan〕」[26]が、合科学習を含む「大正期の自由教育運動における一つの潮流を形づくることになった」[27]と捉えられたりする等、海外の教育方法及び内容、教育思想に影響を受けたことも認められている。なお、Gesamtunterrichit が意味する「合科」は「総合」の別名であると言われることが示すように「合科学習」が現在、学校教育に位置付けられる「総合的な学習の時間」と関係が深いことは周知の通りである[28]。また「ダルトン・プラン」では、学校生活を民主的な共同社会〔Community〕のモデルにするため｛自由〔freedom〕、協働〔cooperation〕[29]、個別的作業〔Individual Work〕｝を原理とし「学習主体である子どもが、集中・没頭できる条件=自由が必要であり、同時にそこでは、集団生活の相互作用が有効に利用されなければならない」「子ども自らが自己の学習課題と自分の能力とを対応させ、計画的に仕事にとりくむとき、もっとも深い興味が生まれるし、最大限の力が発揮できる」[30]との考えに基づき、子どもを尊敬する教育が行われたと言われる。

以上に基づき、今回開発した教材を「合科的な指導」形態の授業として行った妥当性を検討すると｛⑴「総合的な学習の時間」は合科的な授業であり「美術科」との親和性が高い、⑵「美術科」の目標は生活を美的で豊かにすることであり、それは「合科学習」が教材とする生活単元に近い、⑶ アクティブ・ラーニングは「合科学習」で行われた自律的学習であり、自律的学習は「美術科」及び「総合的な学習の時間」における主たる授業形態である、⑷ 教材のモチーフとした SDGs は「合科学習」においては生活単位〔単元〕とされるような生活環境に深く関わる内容である｝等に、妥当性の根拠が認められる。

美術教育では、主たる目的が人間形成と捉えられるため、美術教育は、全人教育や自由教育と見做されることが多い。また人間形成は人間になることを意味するが、このことから上記の内容を敷衍すると、美術教育は、細分化された各教科や各教育内容を全て習得することを必要条件とし、且つ、習得した内容を用いて自由に思考し自由に自己を表現することが可能であることを十分条件とすると言える。このことも「合科学習」と「美術科」が近しい性質を持つことを裏付ける。

5-2 アクティブ・ラーニング形態

本教材に関わる授業は、個人学習、班員とのアクティブ・ラーニング、クラス全体への説明を行う一斉指導の 3 種類の形態で行ったが、個人学習と班員とのアクティブ・ラーニングは各々「ダルトン・プラン」や「合科学習」の授業形態である「個別的作業」〔個人学習〕と「協働学習」〔班学習〕に対応する。これは「ダルトン・プラン」も「合科学習」も、抑々、自由で能動的な自律的学習即ちアクティブ・ラーニング形態の授業を目指していることからも分かる。

本教材開発において、アクティブ・ラーニング形態の場面の設定に当たって、特に検討を重ねたのは、個人で思考する場面と班員と協議する場面の順序、個人で思考する内容と班員と協議する内容についてであった。この検討に際し、観点とした内容を「アクティブラーニング失敗マンダラ」[31]に基づいて示すと、アクティブ・ラーニングにおいては、個人学習の場合は｛不挑戦、怠惰、知識技能不足｝等の原因から｛課題要件違反、安易な解答｝等の失敗が生じ、一方、班学習の場合は｛価値観の固執、組織能力不足、リーダー技能不足｝等の原因から｛浅薄な議論、雑談、発言しない、独断専行｝等の失敗が生じるとされることが挙げられる。こうした観点と生徒の実態とを照らし合わせた結果、上記の 2 点については、各々｛⑴ 生徒個人が考案した SDG18 を 17 種類の SDGs に加えて、班員との協働学習の際の検討対象にすること、⑵ 本教材の最終的な成果物を実際の作品ではなく、四つ切り画用紙を 2 枚繋いだ「完成予想図」にすること｝とした。

また「美術科」においては、一般に、学習内容は成果物に現れると捉えられ、頭の中で考えているだけでは学習目標が達成されたとは見做されない場合も多いが、他方、屡々美術活動と重ねられる「遊び」

は、遊んでいる当人でなければ遊んでいるかどうかは分からないと言われたり、美術の表現のタイプには、表現過程を重視する「行為志向型」と呼ばれる傾向が認められたりすることから、本教材においては、美術の学習における過程の有意性に着目し、「完成予想図」の完成よりも寧ろ「完成予想図」として表現される内容の協議そのものに着目して開発を行った。そのため、仮に教員には、班員同士の協議や制作が滞っているように見えたとしても、そのような場面において、生徒個人が他の班員との間に、作品の完成を目指しつつ、班員の誰もが他者との関係の中で調和を保ちながら個人としても活きるような「動的平衡〔dynamic equilibrium〕」[32]を求め、他者からは見えない思考や創造が個人内では行われていることを念頭に、教員は指導に当たることにした。つまり、教員は、制作や協議が停滞しているように見えても、敢えて、その場に介入したり指導したりすることを極力避けることにした。

なお「動的平衡」と述べた、個人と共同体〔班〕との関係については、学校と国家や経済等の公共性との関係を論じる際に「相対的自律性〔relative autonomy〕」と言われる「個別的には自律的に振る舞う行為の集積が、総体として構造を再生産していく事態を説明する概念」[33]に置き換えることができると考える。人間的行為における「相対的自律性」について、『個人と共同体』を著したヘラー〔Agnes Heller, 1929-2019〕は「個人にとっては――二とおりの意味がある。一方で、それは、個人が自分自身の運命および――直接間接に――自分の統合の運命、人類全体の運命を能動的に形成する可能性であり、同時にその要請でもある。他方で、それは、個人が、必然的に存在するすべてのものを――したがってとくに、それが『まさにそのようにある』事実をとりたてて考えることなく、あらゆる能動的態度を空虚な道徳性や不毛な夢想におちこませてしまう諸要因を――考慮に入れる可能性であり、同時にその要請でもある」[34]と述べるが、ヘラーのこの言からも、班学習という形態がSDGsというモチーフと共に、生徒個人が上記の「動的平衡」及び「相対的自律性」の二つの意味を経験する契機になったと考えられる。

5-3 見立て・インスタレーション

「合科」や「合科的な指導」に影響を与えた「ダルトン・プラン」では｛自由、協働｝を原理としたが、本教材において、生徒が個人の自由と共に協働を実現させ、両者を統合する「相対的自律性」を成立させるための手段と考えられるのが「見立て」と「インスタレーション」である。

上記の「相対的自律性」の説明が示す通り、自由と協働は、本来は相容れない概念である。そこで、自由と協働を統合する論理が必要となるが、それについて、パーカーストは十分に吟味していなかったとの批判がある[35]。しかし、パーカーストは先に引用したように「学習主体である子どもが、集中・没頭できる条件」として自由が必要であると述べており、このことは、遊びの理論として引合いに出されるチクセントミハイ〔Mihaly Csikszentmihalyi, 1934-〕の「フロー体験」や、シラー〔Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759-1805〕の「遊戯衝動」の概念では、課題に没頭することで、感性と理性または主観と客観が統合されると考えられることに重なる。

翻って、本教材において、遊びの要素と考えられるのは「見立て」である。周知の通り「見立て」は、対象を本来の物や事とは異なる他の物や事に擬えて表現する芸術表現の一技法であるが、この「擬える」点が、カイヨワ〔Roger Caillois, 1913-1978〕が挙げた遊びの4分類における「模倣〔ミミクリ〕」に属すと言える[36]。他方、日本美術における「見立て」を研究した早川聞多〔1949-〕が、見立絵の構造として挙げる3分類の一つには「一見似ても似付かないものの間に類似点を発見する機知と、両者の極端な相違点を楽しむ（骨稽構造）」[37]とあり、美術作品における「見立て」が、面白さや可笑しさ等の骨稽〔滑稽〕を生み出すとされ、これは、遊びの条件となる「楽しさ」を意味する。但し「見立て」において肝要なのは、「見立て」は個人が了解する範囲で行われるのではなく、他者が了解する必要が迫られる点である。

このことから、本教材では、制作開始前の教員の説明において、「見立て」について、表11に挙げる「指導観」に基づき、表10の「資料」に掲載した4種類の作品を示したが、この説明によって「見立て」が見立てる元となる「考え」と見立てられた結果である「形と色彩〔色〕」とが、多くの他者において了解できる対を成していることの必要性が理解できるよう目指した。

なお「見立て」のこうした楽しさは、見立てる当人は元より、見立てられた作品を見る他者においても湧き起こる感情であるが、本教材では、他者の見立てられた作品を見た生徒は、予め自ら「見立て」を経験していることもあり、他者の「見立て」のアイデアに対して、より強く興味を持って見ることができると考えられた。そのため、生徒が自身のアイデアに対して自信を持つことができ、班員と共に制作する「完成予想図」の案を検討する際に、互いに譲らぬ生徒たちが見られたことが理解できた。なお、それには「総合的な学習の時間」において、SDGsの内容を深く理解できていたことも背景としてあると考えられ、これらの既習内容に基づいて、生徒個人が、自信を持って自らの「見立て」の視点を表明でき、且つ、冷静に他者の「見立て」のアイデアを受容することができたと考えられた。また「相対的自律性」と関連する「動的平衡」は、個人と社会等、相容れ難い対象について「確かな折り合い〔credible compromise〕」を付ける概念であるが、ハーバート・リード〔Herbert Read, 1893-1968〕は、「動的平衡」において折り合いを付ける対になる対象に、表15に示すような内容を挙げる[38]。この表に基づけば、本教材では「見立て」によって、個人と集団の動的平衡の成立を目論んだことになる。

表15　折り合いを付ける対象

No.	対 象 1	対 象 2
1	the classical	the romantic
2	the individual	the collective society
		the group
		the community
3	the one	the many
4	the particular	the universal
5	organic form	the artwork
6	natural form	artistic form

他方、インスタレーション〔installation〕に関しては、本教材で、初めてインスタレーションに触れる生徒が多いことが考えられたため、授業ではインスタレーションの概念を紹介し、インスタレーションとは、作品を単体として捉えるのではなく、ソフトウェアをコンピュータにインストール〔install〕するように、作品〔ソフトウェア〕が作品を設置〔展示〕した場〔コンピュータ〕を作品にする手法であるとの解説を行った。更に「見立て」の説明で提示した作品がインスタレーションの作品であること、及び、その作品と展示された場の意味について、生徒が理解できるように解説を行った。

インスタレーションに関するこうした説明により、生徒たちの「図〔figure〕と地〔ground〕」の観念を変えることができると考えた。即ち、一般には、作品は「図」、展示される空間は「場」と捉えがちであるが、「ルビンの壺」等の「図地反転図形」のように、生徒においても容易に図と地を入れ換えることが可能になると考えた。更に、そのことを手掛かりに、対象への視点を自在に変えることが可能になり、その結果、自身の作品を客観的に見たり、他者の作品に感情移入したりすることもでき、延いては、自他の関係について思考を深めることができるようになることを目指した。

６. おわりに

本教材の授業を一部参観した学生に依ると、改善点としては｛⑴「環境」や「差別」等の大きなキーワードに対して具体例に及ばず協議が停滞する班があった、作品を構想するために必要な思考過程について生徒が気付く術が必要である、⑵ 表現に凝り、時間を意識できない生徒がいた｝との意見があった。しかし、⑴については、深く考えたために停滞していたとも考えられ、更に⑵については、没入した証拠とも考えられるため、これらの意見に関しては、上記の遊びの例と同様、生徒が考えているのかどうか或いは没入しているのかどうかを見極める必要があると言える。

また、本教材が生徒にとって持つ意味についての回答では｛⑴ メッセージをビジュアルで伝えるための方法を習得し地球規模で考える課題への理解も深まった、⑵ 「総合的な学習の時間」で SDGs について学び「美術科」では SDGs のメッセージの伝え方を考えることで両授業を通して世界が抱える課題に対する考えが深められた、⑶ 他者とのコミュニケーションの手段として美術が効果的に働くことの意味と良さが実感できた｝等が挙がった。

更に、本教材を通して生徒が身に付けた力には｛⑴ メッセージを伝えるために作品を構想する基礎となる力、⑵ 意見の異なる他者との協調性、⑶ 分業する意識や協働する力、⑷ 日本や世界の問題に目を向け問題を考え対処する力｝との回答があった。

なお、参観した学生自身に起こった変化を聞いたところ｛⑴ 世界の課題について考えを深める機会になった、⑵ 本教材が美術用語を多用した授業であったことから、自身が受けたような、学習する知識が少なく発想や表現行為を重視する「美術科」のイメージが払拭され、生徒は美術の内容に対して興味を持ち易く「美術科」に対する苦手意識も払拭される可能性を感じた、⑶ 他者へメッセージを効果的に発信するという「美術科」の題材として SDGs が有効であり、一般に「総合的な学習の時間」と「美術科」の教科横断型授業によって、各授業内容の学習密度が減る可能性が高いが、本教材のような SDGs の題材としての用い方は「総合的な学習の時間」と「美術科」の学習内容が相互に深められる題材であったと感じ、同様に、組み合わせる各教科の学びがより深まるような教材を考える可能性と必要があると考えるようになった｝という回答があった。

一方「美術科」の授業者の感想には｛⑴ 制約が少ない授業であったことや班員との協働する授業形態であったことから、生徒が自主的に活動に取り組んでいた、⑵ 普段の教材よりも生徒の悩みや試行錯誤する場面が会話の中に分かり易く現れていた、⑶ 既習内容を生かしつつ囚われず美術の形や色彩、イメージを用いて課題解決に向かっていた、⑷ 楽しそうに協働制作に取り組んでいた｝という内容が挙げられた。ただ「合科的な指導」形態の授業であったことについての感想では、準備が大変であるのは勿論のこと、大正時代に行われた「合科学習」が、次第に収束した問題と同様に「現在の余りにも短い『美術科』の授業時間数において、指導すべき学習内容を控えて、自由を保証し協働する時間を確保する必要がある点に関しては、葛藤がある」と述べられた。授業者のこれらの感想は、参観者の感想と重なる点も多いが、異なる点を挙げると、既習内容に関する言及と授業実施者としての葛藤の弁であろう。これらはそのまま「合科的な指導」の難しさや周囲からの理解の得難さを示すが、大正時代と異なるのは、本教材でも使用したタブレット PC 等の ICT 機器の普及である。こうした機器の導入に加えて、現在は、個々の違いを勘案し個人にとって最適な教育を提供する「テイラーメイド教育」が追求されていることから、本教材のような授業が、今後普及していく可能性は十分にあると考える。

注

1. Resolution adopted by the General Assembly on 25 September 2015, General Assembly, p.14, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000101401.pdf>〔仮訳版, p.14〕.
2. Education for Sustainable Development: A Roadmap, p.12, <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000374802>.
3. 前掲 1, p.3〔仮訳版, p.2〕.
4. International Arts Education Week 25-31 May 2020, <https://en.unesco.org/news/unesco-celebrates-power-art-and-education-across-globe>〔筆者訳〕.
5. 松井素子, 2019『美術教育学』40, pp.351-364.
6. International Arts Education Week, <https://en.unesco.org/commemorations/artseducationweek>〔筆者訳〕.
7. 前掲 2.
8. 前掲 5, p.352.
9. 「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引（初版）」の送付について（通知）, <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1386202.htm>.
10. 「ESD（持続可能な開発のための教育）推進の手引き（初版）」文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会, 2016 年 3 月, p.9, <https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/31/1369326_01_3.pdf>.
11. 前掲 10, p.22.
12. 前掲 10, p.23.
13. 前掲 10, p.26.
14. 前掲 10, pp.29-30.
15. 国立教育政策研究所「学校における持続可能な開発のための教育（ESD）に関する研究［最終報告書］」2012 年 3 月, pp.4-6, <https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf>.
16. 前掲 15, pp.7-9.
17. 持続可能な開発目標（SDGS）の背景, <https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals/background.html>.
18. 前掲 1, p.2〔仮訳版, pp.0-1〕.
19. 前掲 1, p.5〔仮訳版, p.4〕.
20. 内田裕子, 2016「美術教育における『自由』の解釈についての考察」『美術教育学研究』48, p.87.
21. 中野光, 1968『大正自由教育の研究』黎明書房, p.178.
22. 文部省, 1978『小学校指導書 図画工作編』日本文教出版, p.122, <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s52e/chap1.htm>.
23. 山田丈美・都築繁幸, 2014「教科学的観点から見た合科的指導の実践研究の課題」『教科開発学論集』2, p.199.
24. 井上朋子, 2010「図画工作科と音楽科における合科的な指導の類型化とその可能性」『美術教育』293, pp.14-15.
25. 前掲 21, p.191.
26. ドルトン・プランとも言う。なお、本来のダルトン・プランでは Major Subjects として「数学・歴史・理科・国語・地理・外国語」を対象にしたとされるが、ダルトン・プランに倣い、熊本県立第一高等女学校で実践されたダルトン式学習は、音楽等にも及び、その他にも、師範学校教育改革案として出された中に「手工、音楽、図画、習字、体操等の如き主として技芸に属するものは別に特別に試験を行わないでその作品によりて鑑定するのが当然である」〔前掲 25, p.192, p.196〕とあったとして、Minor Subjects とされる教科につ

いても、敷衍して実践されようとしたことが分かる。

27. 前掲 21, p.191.
28. 中村恵子, 2005「日本における総合・合科的学習：第二次世界大戦以前と以後の学習活動を対比して」『現代社会文化研究』34, pp.37-38.
29. 論文や著書によっては「共同」「協同」の字を当てる。
30. 前掲 21, p.192.
31. 文部科学省「アクティブ・ラーニングの失敗事例調査から」<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/__icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_4.pdf>.
32. 内田裕子, 2016「教員養成課程における『環境芸術』の指導のための基礎知識」『環境芸術』16, pp.89-90.
33. 秦野伸介, 1997「再生産論における『相対的自律性』概念：アルチュセール、ブルデューの議論を中心に」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』49, p.196.
34. アグネス・ヘラー〔著〕, 良知力・小箕俊輔〔訳〕, 1976『個人と共同体』法政大学出版局, pp.95-96.
35. 上原秀一, 1998「日本近代教育における個別化理論の形成：大正新教育のドルトン・プラン移入を手がかりに」『近代教育フォーラム』7, p.132.
36. カイヨワ等の「遊び」の語意や理論については、次の論文に図や解説がある〔椎野信雄, 2011「遊びとゲーム：遊びの貧困の所以」『湘南フォーラム：文教大学湘南総合研究所紀要』15〕。
37. 早川聞多, 1995「見立絵について：『見立て』の構造と意味」『美術史の断面』清文堂出版, p.437.
38. 前掲 32, p.90.

謝辞

本研究を行うに当たり、授業の実践及び調査に協力下さった加須市立昭和中学校の教職員の皆様並びに生徒の皆様に衷心より御礼申し上げます。

参考資料

・池上彰監修, 2020『世界がぐっと近くなる SDGs とボクらをつなぐ本』学研プラス.
・「MAM プロジェクト 028：シオン」<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamproject028/>.
・「フィリピンの砂浜に打ち上げられた『クジラ』の悲痛なメッセージ」TABI LABO, <https://tabi-labo.com/281820/deadwhale-project>.
・「『ヒロシマ・アピールズ』2015 ポスター」<https://shop.jagda.org/item.php?id=I00000773>.
・「塩田千春展：魂がふるえる」<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/shiotachiharu/index.html>.
・熱田千鶴「Hell Global Goals! 2030 年までに目指す、SDGs とは？」『FRaU』2020 年 8 月号, 講談社, pp.18-19.
・AC ジャパン「おむすびころりん、1 億個」〔全国キャンペーン〕<https://www.ad-c.or.jp/campaign/self_all/self_all_02.html>.
・国際連合広報センター「ゴー・ゴールズ！すごろくで SDGs を学ぼう」<https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/go-goals/>.
・ハーバート・リード〔著〕, 周郷博〔訳〕, 1955『美術と社会』牧書房.
・窪田知子, 2006「イギリスのホール・スクール・アプローチに関する一考察：1980 年代のインテグレーションをめぐる議論に焦点を当てて」『京都大学大学院教育学研究科紀要』52.

付録

・本文中に使用する丸括弧は引用文であり、筆者が挿入する際は亀甲括弧を使用し、同種の内容を複数並列する際は波括弧を用いる。

・掲載したサイトへのアクセスは、全て 2021 年 3 月 30 日である。

(2021年3月31日提出)
(2021年5月10日受理)